

FD・SD 報告書

2019 年度

羽陽学園短期大学

2019 年度 FD・SD 活動報告書

目次

2019 年度	羽陽学園短期大学の FD・SD 関連事業について	1
2019 年度	FD・SD 推進委員会事業計画	2
2019 年度	FD・SD 懇談会記録	6
2019 年度	第 1 回 学内公開授業・授業検討会	1 5
2019 年度	第 23 回 FD ネットワーク “つばさ” FD 協議会	1 8
	第 19 回山形大学 FD 合宿セミナー	2 0
2019 年度	全国保育士養成協議会 東北ブロックセミナー 山形大会	2 2
2019 年度	後期授業検討会	3 0
FD・SD 研修会	ハラスメントにどう対処するか	3 2
2019 年度	山形県私立短期大学協会主催 合同研修会	3 6
	第 24 回 FD ネットワークつばさ FD 協議会資料	3 8
2019 年度	教員個人目標に対する自己評価	4 4
2019 年度	卒業時満足度調査	5 8
2019 年度	学修成果アンケート（1 年次・2 年次・専攻科）	6 0
2019 年度	授業改善アンケート（前・後期）	6 6

2019年度の羽陽学園短期大学のFD・SD関連事業について

FD・SD推進委員会委員長 柏倉 弘和

本委員会は、今年度もFD・SD活動の推進を目指していろいろな取り組みを行った。

定例FD・SD懇談会では、学生を交えての懇談を今年度も4回行った。ゼミでの実習の振り返りや授業評価についての意見交換などを通して、学生の率直な考えを聞くことができた。新たな試みとしては、研究倫理に関わるテーマを設定して研究活動における不正行為を確認するとともに、研究倫理を守ることについての認識の深化を図った。

また、業務の効率化に関わるテーマとして会議を取り上げ、教員と事務職員がそれぞれの立場から意見を述べ合った。今後もしできる限り実的なテーマを設定して継続することにより、本学の教育、運営の改善につながるのではないだろうか。

公開授業については、前期に特定の教員の授業の参観と授業検討会を設け、後期に公開授業週間を設けた。前期では専攻科福祉専攻における、適切で安全に援助できる基本的な介護技術を習得するための演習形式の授業を見学した。技術の確認にヒューマンな面も加えた演習の進め方について、活発な討議がなされた。

本年度は、「ハラスメントにどう対処するか」というテーマで、教職員と2年次学生、専攻科の学生を対象に研修会も実施することができた。大学で、そして幼稚園や保育園、介護施設等の職場で、ハラスメントの加害者とならないための注意及び被害者となったときの適切な対処法などについて、弁護士の方を講師として招いて講演していただき、終了後質疑応答も行った。

授業改善アンケートと学習成果アンケートについては、昨年度と同様に両方とも“つばさ”フォーマットのアンケートを用いて行った。結果については教授会で取り上げ検討を加えてはいるが、具体的な授業改善へと結びつけることがまだ十分ではない。

学外研修会などへの参加については、例年通りFDネットワークつばさFD協議会と山形大学FD合宿セミナーには参加できた。FDフォーラムについては二人の教員が参加する予定だったが、新型コロナウイルスへの対応のためにフォーラムの開催が中止になり、残念であった。

今後、短大の運営が厳しくなっていく中で、より一層、教職員間の連携、情報共有が大切になる。FD・SD活動を充実させることは、本学の将来を切り開いていくために欠かせないものであると考えている。

平成 31 年度 FD・SD推進委員会事業計画

◇FD事業内容

(1)定例FD・SD懇談会

前年度に引き続き、【別記】の月間目標や懇談会テーマについて各自の取り組みを検証し、意見交換を行う。学生FD推進のため、定例FD・SD懇談会への学生の参加については継続していく。昼食会形式は継続し、金額を抑え、各教員の負担を少なくする。学生分は学校が負担する。

新たに事務職員目線の懇談会テーマを設定し、教職員がお互いの業務を共有できる場にする。
ゲストを招く。

(2)公開授業—授業検討会

公開授業週間については、前期に特定の教員の公開授業、後期に公開授業週間を設ける。

特定の教員の公開授業については、授業検討会とセットで進める。

今年度も引き続き、非常勤講師の先生方にも参加を呼び掛ける。

(3)FD個人目標—自己評価

前年度の自己評価を踏まえ、各教員が年度当初に具体的な目標を掲げ、年度末にその自己評価を行う。

目標と自己評価は掲示とFD報告書へ記載し、公表する。

(4)授業評価

すべての授業で行う。専任、非常勤ともに“つばさ”フォーマットの授業評価アンケートを用いる。

足りない部分は各教員でオプションの設問を利用する。

授業評価の結果をどのように活用するかが課題として挙がっている。

(5)卒業時満足度調査

今年度も実施する。教授会で報告し担当部署には学生の不満を検討してもらう。

(6)FD・SD活動報告書の作成

内容を精査の上、記載事項の取捨選択を行い、紙面のさらなる充実を図る。

(7)学外企画への参加依頼/相談

学外のFD・SD企画、研修などには可能な限り意欲的に参加し、情報収集に努める。教職員の大学運営への参加意識を高める。

(8)FDネットワーク“つばさ”との連絡

早めにスケジュールを確認し、参加者を募りたい。

学生が参加できる事業については、早期に呼びかけ学生の興味を喚起したい。他大学の学生との交流を通して、広い価値観を持った学生を育成する。

(9)新規事業の企画案・学内ワークショップの企画案

・教員懇談会、学内ワークショップで「授業評価、学習成果等アンケートの結果」をテーマにする。

・教員懇談会、学内ワークショップへの学生参加。

・FD・SDの取り組みに詳しい講師を招聘する。

・ループリックについて、勉強会を実施する。

・基礎教養入門、新入生支援講座、ゼミ活動、カリキュラム、カリキュラムマップ・ツリーについての

見直す機会を作る。

・土日祝日授業を一般開放する。高校生に開放する。(ウィークエンド キャンパス ビジット)

・AED講習会を行う。

(10) 学生FDについて

教員懇談会等への参加を含め、学生とともに羽陽短大の教育を作りあげていく意識を浸透させる。

学外FDワークショップなどに参加できた学生がいれば、他学生に経験を伝えられる場を設けたい。

OFD・SDの基本目標

FD・SDは学生の学びの質向上を目的とし、以下の基本目標を達成するために教職協働で取り組む。

「学生の学ぶ意欲を駆り立てるような働きかけを行う」

「学生が自らの行動について振り返り、自ら成長できるように働きかける」

「学習に適した授業環境づくりに努める」

OFD・SD月間目標と定例FD・SD懇談会（原則、教授会開催日の12時15分～）進行分担

月間目標や懇談会テーマについて、自らの教育活動や職務を振り返り、それぞれの教職員が対等な立場で意見交換を行う。また学生の現状、学習状況などについて、情報を交換できる機会にする。

（各グループにおける話し合いの結果発表は12時45～50分を目処に始める。）

- 4月 目 標：「教職員側から積極的に学生と挨拶を交わす」
「各教員の年間FD教育目標を設定し、公表する」
テーマ：「平成31年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会テーマについて」4/25（木）
司会：柏倉 記録：白崎
- 5月 目 標：「学生の活動に積極的に関わり、名前と呼べる新入生を増やす」
テーマ：「カリキュラム、クラス編成、授業時間割について」（学友会参加）5/30（木）
司会：松田知 記録：大関
- 6月 目 標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」
テーマ：「ゼミでの実習振り返りについて」6/27（木）（学友会参加）
司会：小林 記録：太田
- 7月 目 標：「学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う」
テーマ：「授業評価について考える」7/25（木）（学友会参加）
司会：太田 記録：宮地
- 9月 目 標：「年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう」
テーマ：「研究倫理について」9/26（木）
司会：高橋 記録：柏倉
- 10月 目 標：「学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う」
テーマ：「学生募集、羽陽短大の広報について」10/24（木）
司会：松田水 記録：伊藤
- 11月 目 標：「学習環境を整えるために何ができるかを考えよう」
テーマ：「実習報告会を充実させる方法について」11/28（木）（専攻科参加）
司会：荒木 記録：大木
- 12月 目 標：「ゼミの活動を振り返ろう」
テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について」12/19（木）
司会：白崎 記録：石沢
- 1月 目 標：「2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう」
テーマ：「業務の効率を上げる方法を考える」1/30（木） 司会：宮地 記録：松田知

2月 目 標：「今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける」

「来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる」

テーマ：「シラバスの作成方法について一課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法―」

「FD・SD年間目標の反省」2/27（木）

司会：花田 記録：高桑

- ※ 弁当注文は懇談会の記録担当が行う。前回の懇談会終了後から、集約も含めて早目に行ってください。弁当代は注文された方からの実費徴収です。
- ※ 欠席される場合は早めに記録担当へご連絡ください。
- ※ FD 懇談会に参加できず、司会、記録が担当できない場合は、他の月と交換してください。

4月 定例FD・SD懇談会記録

日時：2019年4月25日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、松田水、太田、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、原田、浦山、片平

司会：柏倉 記録：白崎

月目標：教員側から積極的に学生と挨拶を交わす
各教員の年間FD教育目標を設定し、公開する。

テーマ：平成31年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会テーマについて

懇談会内容

<グループ1>（大木、松田知、松田水、宮地）

- ・年間の重点目標があるとよいのではないか。
- ・懇談会のテーマの内容によっては、お昼の短い時間で取り上げるには難しいテーマもあると感じる。

<グループ2>（渡邊、高桑、花田、伊藤、浦山）

- ・ウィークエンド・キャンパス・ビジットは開催可能なのか。
- ・AED講習はFD・SDで取り上げなくてもよいのではないか
- ・パワハラ、セクハラの講習会を行う。

<グループ3>（柏倉、太田、大関、原田）

- ・ループリックに関して、認識の共有化と、確認をする。
- ・ウィークエンド・キャンパス・ビジットはワーク内容など課題が多いように感じる。

<グループ4>（高橋寛、荒木、白崎、石沢、片平）

- ・FD・SD懇談会の中で出た内容が改善できているか見えにくい。実証が必要。
- ・SDに関する項目が少ないのではないか。

<まとめ>

- ・毎回FD・SD懇談会で話し合われている内容が少しでも改善できるように具体的に行動をしていく必要があると感じた。また、FD・SDという名称ではあるが、スタッフ目線のテーマ項目が少ないため、教職協働の観点でテーマを決めていくとより良くなるのではないかと感じる。
ひと月に一回の短い時間での懇談会だが、今年度も有意義なものにしていきたいと思う。

5月 定例FD・SD懇談会記録

日時：2019年5月30日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、今野、奥山、高橋明、学友会学生4名

司会：松田知 記録：大関

月目標：学生の活動に積極的に関わり、名前で呼べる新入生を増やす。

テーマ：カリキュラム、クラス編成、授業時間割について

懇談会内容

<グループ1>（渡邊、荒木、高桑、松田知、花田、岸彩夏；学友会）

- ・2年次前期は土曜日にほぼ恒常的に補講が入っているが、これらを平日に実施できないか。あるいは、前期の時間割が過密なので、一部を後期に移すことはできないだろうか。
- ・本学の男子学生の人数は少なく、2年次では3名の在籍である。学校に慣れるまで男子は肩身が狭い様子なので、クラス編成の時、1クラスにまとめてもよいのではないか。
- ・介護系の授業（2年前期・木曜・2限目）の時間は、2年生は空き時間となっている学生が多い。自由参加歓迎なので、ぜひ足を運んでほしい。

<グループ2>（大木、高橋寛、松田水、宮地、今野、小野真琴；学友会）

- ・休・退学者の関係で、クラス間の人数に若干偏りが出ている。これらは例えば、ピアノレッスンの開始時間や一人当たりのレッスン時間に偏りを生じさせる結果となっている。平等にならないか。
- ・現行4クラス編成ではあるが、3クラス編成を検討してもよいのではないか。その時は、特定のクラスのみ人数の都合で毎回分割されないような調整が必要である。

<グループ3>（柏倉、伊藤、白崎、石沢、高橋明、助川礼奈；学友会）

- ・やむをえない場合は仕方ないが、急な休講が続くことがあるので、極力減らしてほしい。
- ・特にゼミにおいて、前期に1年生と2年生の交流を図ればよいのではないか。

<グループ4>（太田、小林、大関、奥山、那須萌；学友会）

- ・1年次前期は、まだ大学の90分授業にも不慣れでかつ環境も変化し、心身面での疲労が大きい。さらに行事が入り、放課後は多忙な場合もある。例えば5時限目の授業を繰り上げられないか。
- ・2年次前期の過密時間割でのクラスアピールの実施は、その準備・練習が大きな負担となっている。
- ・実習巡回において、「よく話を聞く」という時間を設けてもらおうと大変な励みになる。そのような巡回になるならば、複数回実施してほしい。

<まとめ>

- ・カリキュラムの組み換えという点、一朝一夕には変更できない問題はある。しかし、日頃の率直な考えをいただいて、できるだけ反映できるよう検討していきたい。

<学生の感想まとめ>

- ・学生の意見を聞いてくれる場があるということをありがたいと思う。テーマが大きいので簡単には変わらないと思うが、学校が良くなるよう今後も意見を出していきたい。

6月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年6月27日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、小林、松田知、太田、松田水、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、本間、石井、諸橋（出張等による欠席：高橋寛、）
学友会（助川礼奈、伊藤樹里、高瀬琴乃）

司会：小林 記録：松田知

月目標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」

テーマ：「ゼミでの実習振り返りについて」

懇談会内容

<グループ1>（小林、宮地、伊藤、石井、助川）

- ・学生から、1年次の実習よりも充実して楽しいという感想から、振り返りができていると感じた。
- ・授業で、科目に関する内容（実習中の制作活動）について、具体的に振り返りができて良かった。
- ・ゼミでの振り返りに、1年次の学生も入ったことから、1年次にも情報が伝わったり、不安がなくなったことからも有意義であった。

<グループ2>（大木、高桑、太田、松田水、諸橋、伊藤樹）

- ・事後指導で、実習ノートに必要事項が記載されていたため、実習の反省などの振り返りがこれまで以上にできた。
- ・実習の反省を、具体的に話すことは振り返るうえで重要なことである。

<グループ3>（渡邊、花田、白崎、石沢、高瀬）

- ・実習中失敗したりして落ち込んでいたが、今日の懇談で先生方から認められ、本人の意欲が向上した。
- ・ゼミでの振り返りは、事後指導と別な視点から振り返られるので、その意義は大きいと考える。

<グループ4>（荒木、柏倉、大関、本間、松田知）

- ・ゼミでの振り返りがあったことから、事後指導も活発に意見が出たようで、その効果はあったと考える。
- ・4月当初に施設実習の振り返りを行ったため、ゼミでの実習の話題が以前よりも多く出るようになった。
- ・少人数のゼミで、振り返ることにより、いろいろな意見が出ることは良いことである。

<学生の感想>

- ・2回目の実習で充実したものであった。実習先に卒業生がいて心強かった。
- ・1年次の実習よりも充実して、楽しい実習であった。懇談会に参加して先生方の意見や体験を聞くことができて有意義であった。
- ・実習後に少し落ち込んだところもあったが、懇談会でいろいろな考え方を聞くことで、次の実習への課題が見つかった。

<まとめ>

- ・ゼミで実習を振り返ることにより、振り返りがより深まり、達成感を感じ、次の実習に活かすことができると考える。また、1年次の学生が参加することは、不安が解消されるなどの効果があると考えられる。

7月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年7月25日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、小林、松田知、太田、松田水、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、浦山、芳賀、吉田

学友会 4名

司会：太田 記録：宮地

月目標：「学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う」

テーマ：「授業評価について考える」

懇談会内容

<グループ1>（荒木、松田知、高橋寛、白崎、吉田、学生）

- ・個々の授業を純粋に評価している学生もいる一方で、やらされている感を持ち、学生の負担が大きい所もあるため、負担が少ない授業評価の方法も検討していく必要があるのではないか。

<グループ2>（大木、松田水、石沢、宮地、芳賀、学生）

- ・授業評価の結果を公開できる場があると、学生も自分の意見が反映されることが分かり、評価することに協力的になるのではないか。自由記述欄にほとんど記載されておらず、具体的な評価がみえない。
- ・表裏に記載する箇所があり、学生が負担に感じていることも予想されることから、表のみの1ページにまとめることも良いのではないか。

<グループ3>（小林、大関、伊藤、浦山、学生）

- ・授業や教員の印象によって『5』のみの評価となることもある。自由記述の部分は書いている学生はあまりいない。
- ・評価を通して、改善した点ややり方を、場当たり的ではなく学生に提示して、今後の見通しを伝えることも必要ではないか。

<グループ4>（渡邊、太田、柏倉、高桑、花田、学生）

- ・あまり考えずに『3』や『5』の評価をつける学生がいる。科目数も多く、評価に慣れてよく考えずに記載してしまう現状がある。
- ・評価後に、学生自身に不利益になるのではないかということを考えたり、めんどくさいと感じて適当な記載になることもあるのではないか。
- ・的確な評価となる場合もあり、教員自身も授業の見直しをし、改善に役立つこともある。
- ・評価する時期は最後にはなるが、授業期間の途中で評価することで改善に結びつけやすくもなるため時期の検討も必要か。

<学生の感想>

- ・先生達が、授業について真剣に考えて、見直したり、改善してくれていることがわかって良かった。
- ・今後、授業評価は適当にならずに、後輩のためにも授業を振り返って記載したいと思う。

<まとめ>

- ・授業評価を答えやすい環境を作ること、評価を受けてどんな改善をしているのか、結果が反映されているのかを評価後学生にわかるようにし、学生の学習意欲に繋げていく必要がある。

9月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年9月26日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、小林、松田知、太田、松田水、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、今野、片平

司会：高橋寛 記録：柏倉

月目標：「年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう」

テーマ：「研究倫理について」

懇談会内容

<グループ1>（荒木、松田知、小林、白崎）

- ・「不誠実な研究活動」とはどういうことかについて話し合った。たとえば、アンケートをとる場合、回答者の思いが明確ではないのに推測を加えて処理したりすることは、不誠実にあたるのではないかな等の意見が出された。

<グループ2>（太田、松田水、石沢、片平）

- ・教員の論文については、学会誌に投稿するもう1本を書くのが、時間も不足していて大変である。先行研究をしっかりと見ているか不安になることもある。
- ・卒論指導については、ウィキペディアのコピー&ペーストではなく、出典をしっかりと示すことをきちんと指導したい。

<グループ3>（渡邊、大木、花田、伊藤、原田）

- ・映像や画像のプライバシーを守ることも大切ではないか。
- ・アンケートで、学生のトラウマを刺激するような設問があって、不許可になったこともある。プライバシーの範囲を明確にすることも必要だ。

<グループ4>（高橋寛、柏倉、大関、宮地、今野）

- ・盗用についての意見交換がなされた。
- ・卒業研究の指導においては、研究倫理の指導は不十分ではないか。
- ・分野によって先行研究の範囲も違ってくる。たとえば、心理学関係では、テーマに関する狭い分野に絞るので、見落とししてしまう場合もある。文学系では、広く調べることが必要である。
- ・研究の中でアンケートをとる時などは、様々なことを想定して十分な準備をしなければならない。

<まとめ>

教員は、自分が研究するだけでなく、学生に卒論の指導もしなければならない。研究の基本を身につけさせることは大切である。教員の日頃の研究的な姿勢が、研究倫理においても学生に影響を与えるのではないだろうか。

10月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年10月24日（木） 12：15～12：55

場所：会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高桑、小林、松田知、太田、松田水、花田、宮地、石沢、伊藤、高橋(明)、本間

欠席：高橋、大関、白崎

司会：松田(水) 記録：伊藤

月目標：「学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う」

テーマ：「学生募集、羽陽短大の広報について」

懇談会内容

<グループ1>（渡邊、太田、高桑、宮地）

- ・他の関係機関と連携の上で、保育、介護に興味のある生徒、中学生を対象に何かしらの対策が必要ではないか。
- ・県外流出はしかたがない、お金の問題がある。
- ・現状として、高校の生徒数の割合にそって入学してくる。

<グループ2>（荒木、柏倉、花田、本間）

- ・口コミが効果がある、高校訪問時に本学の特色、免許(資格)がとれる、入試要項をしっかりと伝える。訪問時対応が同じ先生とは限らない。
- ・高校生に直接話をする機会が必要である。
- ・若者のTV離れでCMの効果があるか疑問である。

<グループ3>（大木、小林、石沢、奥山）

- ・知名度を広める以前からの課題である。
- ・高校生が集まる機会に紙媒体で広報する。
- ・卒業生の出身高校へ卒業生から広報する。
- ・屋外等の看板掲示。

<グループ4>（松田(知)、松田(水)、高橋(明)、伊藤）

- ・ホームページが一新され見やすくなっている。
- ・高校生からの情報収集が必要でないか。

<まとめ>

- ・高校の情報収集が重要である。
- ・高校訪問時に広報に一工夫が必要である。

11月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年11月28日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、太田、小林、松田水、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、石井、諸橋、吉田、 専攻科：齋藤、高橋、松田、森

司会：荒木 記録：大木

月目標：学習環境を整えるために何ができるか考えよう

テーマ：実習報告会を充実させる方法について

懇談会内容

<グループ1> 柏倉・高橋寛、宮地、石沢、諸橋、齋藤（専攻科）

- ・グループでの話し合い等、質問しやすい雰囲気を作ることが必要である。
- ・発表資料の記載内容（1日の流れや具体的な活動内容）を詳しく書くこと、また反省点や改善した内容等の具体的な内容についての発表もあれば、聞く学生自身の事前準備にも活かすことが出来るのではないか。

<グループ2>（渡邊、高桑、白崎、石井、森（専攻科）

- ・1年生は先輩に質問することがなかなかできない。島を作るなどして小グループで質問してはどうか。
- ・和やかな雰囲気での発表会となるように、お茶やお菓子などがあってもよい。
- ・発表の仕方もレジメを読むだけでなく、実習の具体的な内容等についてももっと詳しく伝えるような工夫が必要である。

<グループ3>（太田、小林、松田水、花田、吉田、高橋竜（専攻科）

- ・実習報告会へ参加して、特に問題と思われることはなく、参加者にとっては学びの多いものとなっている。

<グループ4> 荒木、大木、松田、大関、伊藤、松田（専攻科）

- ・参加者の当事者意識を持たせる必要がある。自身の実習への事前の準備（1年次）と振り返り・改善に向けた取り組み等（2年次・専攻科）目的意識を持って聞くことや質問することが必要。
- ・分科会毎の参加人数にばらつきがある。ゼミごとにしてはどうか。（3ゼミ合同等）→知らない人へは質問し辛い。ゼミでは親しい関係にあり質問しやすい。
- ・意見のやり取り、望ましいディスカッションの方法を知る、ディスカッションのトレーニングの場としていくことが必要では。

<参加学生の感想>

- ・学生のための話し合いが行われており、学生の意見を反映できる場となっている。

<まとめ>

- ・実習報告会の目的（1年次・2年次・専攻科それぞれの）を踏まえ、そのあり方、課題について検討していくこと、活発な質疑応答を通しディスカッションのトレーニングの場となるように、学生の意見も参考にしながら具体的に検討していくことが必要である。

12月 定例FD・SD懇談会記録

日時：令和元年12月19日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、太田、小林、松田水、花田、大関、伊藤、白崎、石沢、浦山、芳賀、片平

司会：白崎 記録：石沢

月目標：ゼミの活動を振り返ろう

テーマ：ゼミ卒業研究で育てる能力について

懇談会内容

<グループ1>（大関、小林、伊藤、石沢）

- ・ゼミでは、学生の居場所づくり、人との直接的な関わりを深める機会にしている。
- ・卒業研究では、研究を通してパソコンの使い方、資料の探し方、まとめる力を身につける。
- ・現在の卒業研究のスタイルでは無理がきているのではないか。「実習での体験をまとめた事例集を作成、PDF化してゼミ内で共有する」、などの形も提案させていただく。

<グループ2>（渡邊、高桑、花田、芳賀）

- ・ゼミは、様々な学生が関わり合いを持ち人間関係を構築する場として考えている。
- ・卒業研究は、コピペ、引用と自分の意見との区別がつくように記載することを指導している。
- ・卒業研究のテーマは、実習で行った実践など、自らの体験に基づくものを学生に考えさせておくと、スムーズに研究に入ることができる。

<グループ3>（柏倉、松田知、大木、高橋寛、浦山）

- ・短大生活2年間で卒業研究に取り組む時間をとることが難しい中で、ゼミ毎の特徴を活かして進めていることがわかった。1年次からテーマを考える機会を設けたり、中間発表をすることで取り組みやすくなるのではないか。

<グループ4>（荒木、太田、松田水、白崎、片平）

- ・卒業研究では、インターネットからのコピペが多くあるが、引用元を確認することを指導している。
- ・学生の本の貸し出し数も少なくなっている。それだけインターネットに頼っている。研究を行う事で、調べる力、まとめる力をつけることになるのではないか。

<まとめ>

- ・卒業研究指導を本格的に行う時間が取れない中で、それぞれの先生方が専門性を活かしながら指導してくださっている。現在、学生は調べ物のさいにはインターネットを活用し簡単に済ましてしまいが、卒業研究を通して、幅広い物事に興味を持ち、考えを深めるきっかけにしてほしい。

1月 定例FD・SD懇談会記録

日時：2020年1月30日（木）

場所：本学会議室

出席者：渡邊、大木、荒木、柏倉、高橋寛、高桑、松田知、小林、松田水、太田、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、今野、奥山、原田（欠席；太田）

司会：宮地 記録：大関

月目標：2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう。

テーマ：業務の効率を上げる方法を考える -会議について-

懇談会内容

<グループ1>（渡邊、大木、高橋寛、高桑、柏倉）

- ・たとえ会議を減らしても、その効率が変わったとは言えない。よって、個人個人で業務の効率化を図ることから始めるべきではないか。
- ・指導に多大な時間を要する学生が増えている。また、授業に出席するだけで単位が取れると勘違いしている学生も増えている。初年次教育等で、単位認定にあたっては一定の成果が必要であり、そのために意識をもって臨むことが常識であるというメッセージを伝え、価値観を変えていくべきである。
- ・本学は他学と比して、会議は少ない方である。

<グループ2>（松田知、花田、伊藤、白崎、奥山）

- ・授業が1コマ90分であることから、会議も90分という錯覚があるのではないか。
- ・会議においては議題があるわけであるが、中にはどの委員会で審議すべきか不明瞭なまま、結局何らかの会議に諮られる場合もある。どの委員会の分掌であるのか、事前に検討すべきではないか。

<グループ3>（小林、宮地、石沢、今野）

- ・会議における配布資料は重要なものが選別されており、また、共有フォルダでファイルが共有されているため、随時確認がとりやすい。この点は既に効率化が実現できているのではないか。有効なツールは利用していくべきである。
- ・時間を要したとしても、重要な案件は資料に加え、口頭で共有・意見交換すべきであろう。

<グループ4>（荒木、松田水、大関、原田）

- ・「会議」と「懇談」は異なる。各自が奔放に意見を述べて、結局決定内容が曖昧なまま終了している「会議」はないだろうか。会議とはどうあるべきか確認が必要ではないか。同時に、懇談の場も必要であろう。
- ・会議の前に関係各位で適宜情報交換を行い、その上で作成された原案が会議で提示されれば、より意義のある会議になるのではないか。
- ・原案に反対する場合は、代案をもって行った方がより生産的な会議になるだろう。

<まとめ>

- ・（司会者が）施設・病院に勤務していた際は、ミーティング時や食後などにこまめにカンファレンスが行われていた。電子カルテが普及してきても同様である。PC・資料等での情報の共有だけではなく、日々のコミュニケーションを積極的に図ることも重要であろう。

2019年度 第1回 学内公開授業・授業検討会

記録：宮地康子

はじめに

第一回目は前期の公開授業を専攻科福祉専攻の授業とし、授業検討会を開催した。

1. 公開授業の概要

- 日時：2019年5月24日（金）2限目
- 会場：介護実習室
- 科目：生活支援技術 I
- 担当：荒木隆俊教授、松田水月准教授、宮地康子講師
- 対象：専攻科福祉専攻 学生
- 参観者：本学専任教員
- 内容： 自立に向けた身じたくの介護 『口腔ケア』について

【本授業の進め方】

教科書に基づき、教員が作成した資料に書き込みながら、基本的な口腔ケアについて学ぶ。次に、学生同士が実際に3種類の口腔ケアの物品（歯ブラシ、スポンジブラシ、歯磨きティッシュ）を用いて演習する。最後に、グループで気付いた点等を発表し、まとめる。

【これまでの授業の流れ】

口腔ケアを学ぶ前に、自立に向けた身じたくの介護に関して、衣類の着脱や爪切り、整容等がある。生活支援技術 I の授業においては、教科書を用いて根拠や手技の留意点を学び、実際に演習を通して技術を習得できるように配慮している。さらに「こころとからだ I」において解剖学的な側面や「発達と老化の理解」において疾患等を並行して学んでおり、複数の科目の重なる部分を意識しながら学生に伝えている。

2. 授業検討会

- 日時：2019年5月30日（木）13:05～
- 場所：会議室
- 参加者：本学教員
- 司会者：太田裕子教授
- 進行：授業担当者自評→グループ討議→討議内容報告

(1) 授業担当者自評

教科書、資料、演習、グループの話し合いの時間配分や演習内容について改めて見直すことができた。学生が限られた時間の中で、知識と技術を習得させることが難しい。よって、これまで幼児教育で学んだこと、共通点や異なる点を引き出しながら理解を深めていくことが大切である。

複数教員の担当のため、多方面からの指導ができる。今後も情報共有に努め、多様性を理解できる学生を育てていきたい。

(2) グループ討議内容の報告 (○は授業実施者)

①A グループ (○宮地、渡邊、高橋、白崎)

- ・人数配分が適当である。
- ・学生が利用者になりきっており、実践に結び付くものであった。
- ・演習が盛り上がっている時の途中の留意点の伝え方が難しい。ハンドスピーカーがあると声を届けやすいのではないか。
- ・恥ずかしいというような気持ち等、体験してわかることもたくさんあり、演習の大切さがわかった。

②B グループ (○松田水、大木、小林、伊藤)

- ・教科書→書き込み→解説→演習という内容の理解をしてから演習へという授業の流れが良かった。
- ・生活支援技術は他科目「こころとからだ」の科目とリンクしており、根拠に基づいた介護技術を学ぶことが大切である。
- ・国家試験があり、演習だけでなく教科書にふれ、ポイントをおさえた学びを意識している。
- ・幼児教育科での学びと関連しており、繋げることができれば深く学ぶことができる。
- ・複数で担当をもっているため、考えが異なる場合もあるが、介護と看護の視点から学生へ伝えることによって、様々な視点からアプローチできるようになることを期待している。

③C グループ (○荒木、柏倉、松田知、大関、石沢)

- ・技術面の正しさを最初に教えてしまうと手順を優先させてしまう学生もいるのではないかと。個別の支援も必要である。
- ・幼児教育科で学んだ‘相手に合わせて’援助方法を変化させることは、介護でも共通している。学びをリンクさせたい。

(3) その他意見、まとめ

今回の公開授業を通して専攻科の授業の一部を見ていただき、専攻科での授業と幼児教育科の学びが繋がっており、子どもから高齢者までに対応できる人材育成ができるよう、学生へ意識的に伝えていく必要があるのではないかと。福祉人材の不足が課題となる中、保育と介護を全体的に学ぶことの意味を今後も考えて伝えていきたい。



授業担当者自評



グループ討議

「第23回FDネットワーク“つばさ”FD協議会」

報告： 柏倉 弘和

1. 期日：令和元年5月25日（土） 13：00～17：15

2. 会場：山形大学 小白川キャンパス

3. 本学参加者： 柏倉 弘和

4. プログラム

第1部 協議会（13:00～14:00）

第2部 事例報告（14：00～14：45）

第3部 ワークショップ（15:20～17:15）

①分科会（15：20～16：40）

②全体発表（16：45～17：15）

5. 内容報告

（1）第1部 協議会

①FD協議会議長の選出について 小田 隆治氏が選ばれた。

②FDネットワーク“つばさ”令和元年度事業計画について

・令和元年度事業計画について、各種事業が例年通り実施されることが報告された。

③授業改善アンケート及び学習成果等アンケートの実施方法変更について

・各アンケートの実施方法の変更について報告された。

（2）第2部 事例報告

①北翔大学 FD支援委員会委員長 教育文化学部芸術学科 松澤 衛 准教授

「北翔大の学生FD活動について」

②東日本国際大学・いわき短期大学 教務部 野木 顕信 係長

「自校の教育改革・改善の取り組みについて」

③山形大学 地域教育文化学部 中西 正樹 教授

「山形大学におけるデータサイエンス教育の今後の取り組み

～他大学との教材の共有化を目指して～」

（3）第3部 ワークショップ

①分科会

・第一分科会／FD・SD研修会（学生FD活動、学生支援、就職支援など）

・第二分科会／学生の主体的な学び（自校の教育改革・改善）

（教育改革・改善、教育企画、学修成果の可視化など）

・第三分科会／カリキュラム・全学共通の新規授業

(アクティブラーニング、フィールドラーニング、データサイエンスの授業など)

② 全体発表

第19回山形大学FD合宿セミナー
—相互研鑽による大学教育の飛躍を目指して—

報告：石沢恵理

1. 期日：令和元年9月2日（月）～3日（火） 13：00～11：40
2. 会場：協同の杜JA研修所（山形市）
3. 主催：山形大学教育開発連携支援センター
4. プログラム
【第1日目】
 - 13：45 セミナー開会
 - 14：30 オリエンテーション
 - 14：40 アイスブレイキング
 - 15：00 プログラムⅠ 「科目設計1：授業名と目標、内容の作成」
 - 16：30 休憩
 - 16：40 プログラムⅡ 「科目設計2：シラバスの完成」
 - 18：10～夕食・懇親会、就寝
【第2日目】
 - 7：30 朝食
 - 8：30 プログラムⅢ 「アクティブ・ラーニングについて考える」
 - 10：00 休憩
 - 10：10 プログラムⅣ 「アクティブ・ラーニングの実践」
 - 11：40 修了式、解散
5. 参加校：7校8名
6. 本学参加者：講師 石沢恵理

7. 内容報告

この度の山形大学 FD 合宿セミナーは、アクティブ・ラーニングの重要性について、様々な専門を持つ先生方と意見を交わし、学びあう貴重な機会となった。

1日目のプログラムでは、2つのグループに分かれアイスブレイキングを行った後に、それぞれがアクティブ・ラーニングを授業にどのように取り入れているのかについて意見を出し合った。現在、アクティブ・ラーニングを授業に取り入れることは必須とされているが、他分野の先生方とお話しする中で、分野や授業形態によって、取り入れ方は大きく異なることが明らかになった。また、小田先生の講義から、アクティブ・ラーニングを取り入れることで、学生の学びにどのような影響を与えるのかということも、シラバスに記載する、もしくは授業内で伝えるなど学生に具体的に提示することの必要性も学ぶことができた。

このような形で、授業設計についてご指導をいただいた後に、プログラム1「授業名と目標、内容の作成」を行った。私はBチームのメンバーとして、「新入生がコミュニケーションを図り、地域社会について理解する。」ことを目的とした演習系の授業を考えることになった。話し合いでは、進行役の先生、他大学の授業内容を調査する先生、各自が役割を持つことでスムーズに話し合いを進めることができた。自身も、話し合いの内容をレコーディングすることで考える材料をまとめることができた。また、学生が授業で考えた内容を実践する機会をどのように設けるのかという点を具体的に考えることに苦勞した。具体的な授業内容まで考えることで、学生が授業目的を適切に理解する内容になっているのか再考察するきっかけになった。

2日目のプログラム「アクティブ・ラーニングの実践」では、初日に話した授業内容を教員役と学生役に分かれてロールプレイすることで発表しあった。その際に、「アクティブ・ラーニングを具体的に取り入れる」こと、「授業で起こりうる失敗と、成功に至るプロセスを取り入れる」ことが指示された。私たちBチームは、第1回目の授業を想定し、発表を行った。教員役の先生がパワーポイントを活用し視覚的にわかりやすく授業内容を説明したり、過去に授業を履修した3年生に授業で得た学びを発表してもらう機会をつくることで、学生の意欲を引き出す工夫を行った。また、教員に反抗的な態度をとる学生を熱演してくだる先生がいらしたことで、本番さながらのロールプレイとなった。もう1つのAチームでは、パワーポイントを活用した丁寧な授業が進められ、多様な授業展開について学ぶことができた。ロールプレイを終えたころには、今回考えた授業が、実際に行われるのではないかというくらい現実味を持ったものになっていた。

今回のセミナー全体を通して、「学生に授業をさせる」のではなく、授業を行いながらも教員自らが、学生とともに学んでいく姿勢の大切さを学ぶことができた大変貴重な時間となった。

2019年度 全国保育士養成協議会 東北ブロックセミナー 山形大会
「保育現場における「保育の質の向上」と保育士養成校の役割・課題」
—多角度から探る協働の態様—

期日：2019年11月16日（土）・17日（日）

会場：山形テルサ

①大会一日目

○基調講演

講師：全国保育士養成協議会 副会長 小川 清美 氏（日本保育者養成教育学会会長 大妻女子大学 教授）

演題：保育現場における「保育の質の向上」と保育士養成校の役割・課題

概要 本講演では、保育士養成側から見た保育士養成教育の現状や課題について、それぞれ実習・就職・研修の面から発題いただき、「保育の質の向上」を図っていくための養成校と現場とで果たしうるそれぞれの機能や役割と、協働の態様についてご提議いただいた。

○第一分科会 保育実習における保育現場と保育士養成校の協働

司会者・・・聖和学園短期大学 准教授 石森 真由子 氏

発題者Ⅰ・・・社会福祉法人照護会 松ヶ岬保育園 園長 佐々木 正乗 氏

発題者Ⅱ・・・羽陽学園短期大学 教授 高橋 寛 氏

概要 保育実習は、限られた期間でありながらも、学生自身に大きな影響を与える。実習の展開や指導・実践方法は現場によっても様々であると同時に、養成校での実習指導の展開や方法も様々である。

第一分科会では、現場で指導する立場の職員と養成校で指導する教職員とが本音で意見を述べ合う機会とし、それぞれの役割や課題を確認し、相互理解を深めながら、協働の方向性と具体的方策を探り合った。

○第2分科会 施設実習における保育現場と保育士養成校の協働

司会者・・・郡山健康科学専門学校 教員 細川 梢 氏

発題者Ⅰ・・・社会福祉法人山形市社会福祉事業団 山形学園 前園長 片桐 弥生 氏

発題者Ⅱ・・・東北文教大学短期大学部 教授 佐久間 美智雄 氏

概要 施設実習は、多くの施設種別があり、乳児から高齢期まで利用者の年齢層も幅広く、入所理由も様々などとても多様だが、共通していることは実習前と実習後とで学生自身に大きな変化を生じさせることである。本分科会では、現場で指導する立場の職員と養成校で指導する教職員とが本音で意見を述べ合う機会とし、それぞれの役割や課題を確認し、相互理解を深めながら、協働の方向性と具体的方

略を探り合った。

○第3分科会 就職における保育現場と保育士養成校の協働

司会者・・・東北福祉大学 教授 和田 明人 氏

発題者Ⅰ・・・東北福祉大学 プロジェクト代表

教育学部4年生 伊藤 葵 氏

教育学部4年生 成ヶ澤 咲希 氏

総合福祉学部4年生 石山 優子 氏

教育学部4年生 橋本 日菜 氏

発題者Ⅱ・・・社会福祉法人酒田保育教会 浜中保育園

園長 佐藤 かえで 氏

概要

保育士不足が深刻化する中、求人側（現場）にとっては人材確保戦略が、求職側（学生）にとっては唯一の職場の見極め方が大きな課題となっている。

この分科会では当事者の学生が登壇して養成校における就職活動の実例について話題提供し、それぞれの立場でなににどのように取り組むのか、役割や課題を確認しながら、協働の方向性と具体的方略を探り合った。

○第4分科会 研修における保育現場と保育士養成校の協働

司会者・・・東北福祉大学 准教授 利根川 智子 氏

発題者Ⅰ・・・社会福祉法人三瀬保育会 三瀬保育園 園長 本間 日出子 氏

発題者Ⅱ・・・東北文教大学 准教授 下村 一彦 氏

概要

「保育の質の向上」を図っていく上で、保育者個人・保育組織レベルのいずれにおいても“学び”は不可欠だ。しかしながら、現場の業務は煩雑化する一方であり、現実には研修の機会を設定することですら困難になりつつある。こうした状況下におかれている現場の実態に、各保育士養成校・教職員・関連団体は、問題解決に向けてどのようにコミットできるか、役割や課題を確認し、相互理解を深めながら、協働の方向性と具体的方略を探り合った。

②大会 2 日目

○シンポジウム

テーマ：保育現場における「保育の質の向上」と保育士養成校の役割・課題
－多角度から探る協働の態様－

司会者・・・東北福祉大学 教授 小坂 徹 氏

発題者Ⅰ・・・東北生活文化大学短期大学部 教授 三浦 主博 氏

発題者Ⅱ・・・東北文教大学 准教授 福田 真一 氏

発題者Ⅲ・・・聖和学園短期大学 准教授 上村 裕樹 氏

概要 本シンポジウムでは、東北ブロックセミナーにおいて 3 年連続で同一テーマとしてきた「保育現場における『保育の質の向上』と保育士養成校の役割・課題」について、総括的に議論した。

トピックとして他ブロックセミナーや活動状況をも紹介しながら、実習・就職・研修の面のみならず、全国組織と地方組織、学生と現任保育士など、多角度から協働の態様を探っていった。

前日の基調講演の内容や分科会での討議結果をも踏まえつつ、指定討論者を加えて議論を掘り下げ、参加者全員でのグループ討議も行いながら、今後の方向性と具体的方略を探り合った。

○第1分科会配付資料

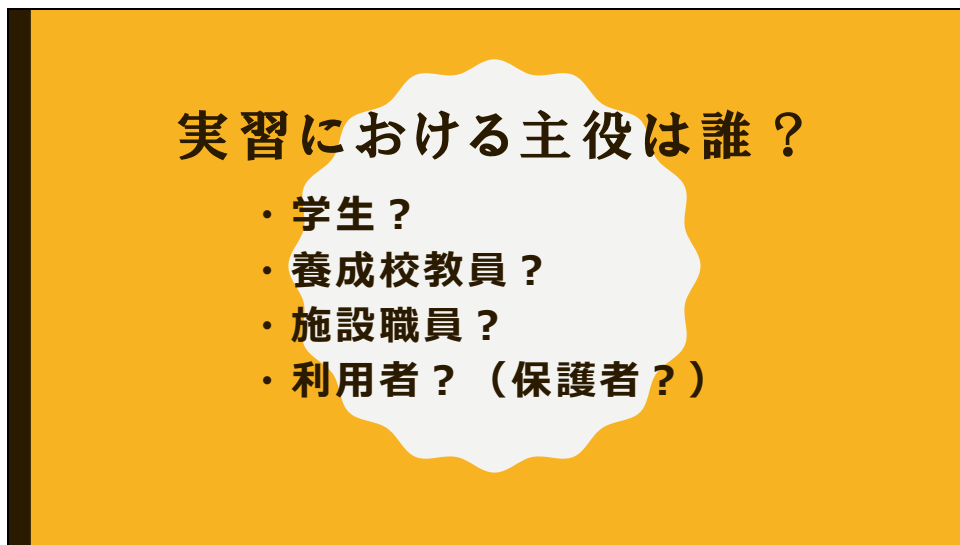
スライド 1



保育士養成校で指導したい
【実習生の基準】とは

羽陽学園短期大学
高橋 寛

スライド 2



実習における主役は誰？

- ・ 学生？
- ・ 養成校教員？
- ・ 施設職員？
- ・ 利用者？（保護者？）

社会常識とは？誰にとっての？

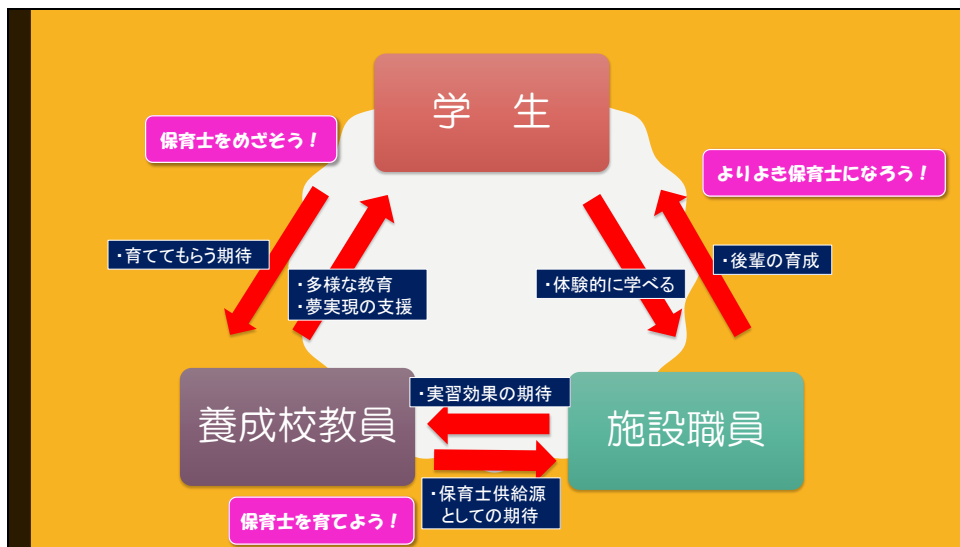
- ・ 学生？
- ・ 養成校教員？
- ・ 施設職員？
- ・ 利用者？（保護者？）

常識の軸は一致しているか？

- ・ 世代のギャップ？
- ・ 文章能力、言葉遣い？
- ・ 様々な価値観？

自分ファースト？

- ・ 学生？
- ・ 養成校教員？
- ・ 施設職員？
- ・ 利用者？（保護者？）
- ・ 優先順位の決め方は？



若者の特権は変化できること！

- ・ 実習を重ねて成長！
- ・ 二年間で大人に！
- ・ 養成は至難の業？！

多面体である人間が、各種実習で
同じような指摘を受けることは、
心に響くはず！

- ・ 施設側からの指導の有難さ！
- ・ 養成校教員は痛感！
- ・ 後輩を育成する使命感！

**養成校と実習施設が連携を
取り合い、時代・学生に合致した
実習生の基準】を模索し、指導する。**

- ・ 独善に陥らない！
- ・ 社会に自身を晒す努力
- ・ 世の中から隔絶しない
- ・ フィードバックに感謝！

2019 年度後期授業検討会 記録

開催日時 令和元年 12 月 19 日 16:10～17:10

出席者 大木、荒木、松田知、柏倉（司会）、高橋寛、高桑、小林、
松田水、花田、大関、伊藤、白崎、石沢、太田(記録)

欠席者 宮地（出張）

公開授業（令和元年 12 月 2 日～12 月 6 日）、授業改善アンケート集計結果（平成 30 年度前期・後期）を基に、3 グループに分かれて授業改善について検討した。その後各グループの発表を行い、全教員で検討内容を共有した。

グループ A 大木、高桑、松田水、花田、伊藤

グループ B 荒木、柏倉、大関、白崎

グループ C 高橋寛、松田知、小林、石沢、太田

①公開授業を基にした、授業改善についての検討内容

- ・パワーポイントによる情報提示だけでなく、ノートの取り方としてプリントの切り貼り等の作業を行うことで学生が意欲的になる面もある。また、その経験を他の授業のノート作成に活かす学生もいる。ただ、ノートの取り方については、学生が身につけておくべきものなのか、そこまで指導すべきものなのかということに検討の余地がある。
- ・伝えたい情報が多くなるため、話し方、講義の進め方のペースが速くなってしまう場合がある。講義内容は学生にとっては未知のものであるため、学生に合わせたペースを意識することで学生の理解度が高まるように思う。場合によっては、くどい位説明を加えることが必要なこともある。
- ・「情報科学」は必修となってから約 20 年が経過している。当該授業で扱われている内容は自分自身があまり触れない分野だが、授業を参観して世の中では確実に必要とされるものであり、活用方法の実際を知れたことは有意義だった。
- ・空欄のあるプリントを用いて、学生が教科書、幼稚園教育要領を調べながらプリント作成を行うという進め方が良かった。時間不足により今回の授業では完成版が提示されなかったため、学生が確認できれば尚良かった。
- ・実習での体験を踏まえて、一般的な子どもの発達の様相と比較して各年齢の発達を学生に認識させていた点が良かった。理論と実践の両面から子どもの姿を捉えることに繋がるのではないか。実習後に、例えばどのような遊びや歌が子ども達の中で流行っていたか等を尋ねると、様々な例が挙げられる。本学の学生は、体験したことをシェアするのは得意である。その長所を授業で活かしていきたい。
- ・「介護技術演習」では、演習後に担当の 3 名の教員が当該授業のねらいを明確に伝えており、それにより学生自身もしっかり振り返りを行うことが出来ていた。振り返りの重要性を再認識することができた。

- ・介護施設で利用者の方々と関わる実践のドキュメンテーションの振り返りにおいて、評価時に自己評価と他者評価を行うことで、学生の関心が高まっていた。チェックシートを使用してコメントを書く工夫もあり、学生参加型授業となるような働きかけが参考になった。

②授業改善アンケート結果を基にした、授業改善についての検討内容

- ・同じ音楽関係の授業でも、例えば「前期・音楽基礎 B」、「前期・こどもと音楽 B」では、1週間あたりの授業時間外の学修時間が1時間以上であるとした学生の比率が高い。一方、それらと比較すると「前期・こどもと音楽 C」「後期・こどもと音楽 A」では数字が低い。前者はピアノに関する授業で、ピアノの課題、試験があり、学生が越えなければならないハードルが事前にしっかりと与えられて準備するようとの指示が明確にある。後者は歌に関する授業で、歌を何曲か覚えて来るようといった具体的な課題が与えられていない。課題を与えた方が良いのかと考えることもあるが、テクニックが求められるピアノに対して歌では求められるものが音程であるため、声の出し方、声によるコミュニケーションの取り方を直接伝えることを大事にしている。相手に応じて、また相手との距離に応じて声の量や質も変えなくてはならないということは、コミュニケーションにより伝えていくものであるため、授業時間外の学修時間に差は生じるが、教える内容によって課題の与え方を考えるべきだと思う。
- ・実技系の授業のひとつである図画工作では、授業時間外に実施する課題を与えることはしておらず、1週間あたりの授業時間外の学修時間が1時間以上であるとした学生の比率が特に高いわけではないが、次の授業までに自発的に制作を行ってくる学生もおり、それが授業時間外の学修時間の個人差に繋がっている。制作の進捗状況等に目を配ることで各学生の取り組みを把握することは有意義だと思う。
- ・授業を受ける人数が少なめの科目の評定が高い傾向も見られる。人数が少ないことで、学生と教員とが意見や感想をやり取りながらの授業が行いやすくなるのが、その理由として考えられるのではないかと。大人数での授業でも、グループワーク等を取り入れることで、教員と学生間、また学生同士でのコミュニケーションをとることは可能である。実際に授業内で実施しているグループワークの工夫として、全員に何かしら役割があるように学生に各役割を決定させたり、何もしない学生が生じないようにグループの構成人数を絞ったり、グループワークについて教員が気づいたことをまめに伝えたりといったことが挙げられる。他の授業においても参考になる配慮点であるように思う。
- ・今後、自分の担当する科目の授業改善アンケート結果に基づいて授業改善についてのレポートをまとめ、それを教員間で共有化していくという方法も、一考に値するのではないだろうか。



FD・SD 研修会 ハラスメントにどう対処するか

報告：石沢恵理

出席者 渡邊、大木、荒木、松田知、柏倉、高橋寛、高桑、太田、小林、
松田水、花田、大関、宮地、伊藤、白崎、石沢、今野、浦山、本間、奥山、
芳賀、石井、片平、諸橋
欠席者 原田、高橋

1. 日時 / 会場 / 対象

令和2年2月4日(火)13:00~14:30 / 8号室 / 本学教職員・2学年・専攻科学生

2. 講師

弁護士 安孫子英彦先生

3. 研修会 講演内容

(1) 職場や学校でのハラスメント

- ・「ハラスメント」とは、嫌がらせのこと。職場でのハラスメントがあると被害者は心身共に大きなダメージを受ける。また、そうしたことが職場で起こると、職場環境が悪くなり、会社としての機能が低下し、対外的なイメージも悪くなる。被害者・加害者にならないように学ぶことが重要。

(2) パワーハラスメントとは何か

- ・パワーハラスメントは、以下のように示されている。(厚生労働省の資料より)
 - ① 優越的な関係を背景とした言動であって、
 - ② 業務上必要かつ相当な範囲を超えたものにより、
 - ③ 労働者の就業環境が害されること。- ・「優越的な関係を背景とした」とあるが、部下から上司へのパワハラもある。

(3) パワーハラスメントの行為類型と被害の実例について

- ・パワーハラスメントの行為はおよそ6つに分けられる。(厚生労働省の資料より)
 - ① 精神的な攻撃 (脅迫・名誉毀損・侮辱・ひどい暴言)
 - ② 過大な要求 (業務上明らかに不要なことや遂行不可能なことの強制)
 - ③ 人間関係からの切り離し (隔離・仲間外れ・無視)
 - ④ 個の侵害 (私的なことに過度に立ち入ること)
 - ⑤ 過小な要求 (業務上の合理性なく、能力や経験とかけ離れた程度の低い仕事を命じる ことや仕事を与えない)

⑥ 身体的な攻撃（暴行、傷害）

(4) セクシャルハラスメントとは何か

●大きく2つに分けられる。

① 対価型セクシャルハラスメント

- ・職場で性的な言動や要求をされて、それを拒否した場合に、その労働者が解雇、降格、減給などの労働条件について不利益を受けること。

② 環境型セクシャルハラスメント

- ・職場で労働者の意に反する性的な言動により、労働者の就業環境が不快なものになること。

●セクシャルハラスメントになり得る言動として以下のようなものがある。（日本弁護士連合会資料より）

① 性的な内容の発言

- ・食事やデートにしつこく誘い続けること、身体的な特徴、容姿の良し悪し等を話題にすることなど。

② 性的な行動

- ・性的な関係を強要すること、カラオケのデュエットを強要するなど、相手が嫌がっていることを強要することが問題にあたる。

③ 性別により差別するもの

- ・「男のくせに」、「女のくせに」といった発言など。

●セクハラを受けた場合

- ・人によっては受け流したり我慢することがあるが、職場でそうした行為が普通になってしまう。ハラスメントを受けた場合は、はっきりと抵抗する。また、職場の相談窓口や上司に相談し、声を上げることが大切。
- ・女性上司から男性部下へのハラスメントもあるので注意。

(5) パワーハラスメントが起こりやすくなる原因

- ・立場が上の人が指導をするさいに感情が高ぶって興奮してしまう場合がある。また、上司と部下の間でコミュニケーションが取れていないと起こりうることもある。
- ・職場環境として休みを自由に取らざらざらと起こりやすい傾向がある。

(6) パワーハラスメント、セクシャルハラスメントが起きないようにするために

- ・基本的に、相手を尊重することが大切。
- ・お互いを理解し、思いあうことが重要。日ごろのコミュニケーションをこまめに行う。また、受け取る側がどのように感じているのかを考えて個々に合わせた配慮をすること。
- ・指導する際には何に対して指導しているのかを明確にする。

(7) ハラスメント行為者の責任

①懲戒処分

- ・会社の就業規則により処分が決まっている。最悪の場合、懲戒解雇に該当する。

②民事責任(損害賠償責任)

- ・職場内だけに留まらない場合、被害者から慰謝料請求されることがある。

③刑事責任(刑事罰)

- ・身体への暴行、強制猥褻罪であれば、刑事裁判になることもある。

(8) ハラスメント被害者の対応

①職場の相談窓口

- ・どのような職場でも相談窓口を設けることが義務付けられている。上司が加害者の場合は、異なる部署の上司に相談する。

②労働局、労働基準監督署

- ・山形労働局は山交ビル3階に入っている。職場に相談しづらい場合は、こちらに相談するのが良い。

③弁護士会法律相談

- ・会社を相手に裁判を行う、警察署へ相談を行う前に相談にのってもらえる。

④裁判所

- ・労働問題の場合、労働審判として相手に慰謝料を請求することができる。調停手続きを行ってもまとまらない場合は、裁判所が審判を行う。

⑤警察署

- ・県本部の相談窓口、各警察署の担当部署がある。女性の警官が対応してくれる。

(9) 質疑応答

0先生 : 指導とパワハラとの境界線が曖昧。「多大な」という判断は、どのような基準で誰が判断するものなのか。

安孫子先生 : 非常にむずかしい。パワハラ発言を録音して証拠を残す方が多く、それが判断材料になる。

T先生 : もし、保育所や幼稚園で保育者が妊娠・出産した場合に、辞職を強要された場合パワハラにあたるのか。また、実際に訴えると職場にいつらくなる。どのように対応するとよいか。

安孫子先生 : 妊娠・出産で辞めろというのは、不当労働行為にあたる。続けたい場合は、必要な有給休暇を使うことができるが有給日数を超えると欠勤扱いになってしまう。職場では、妊娠・出産に合わせて労働者の仕事内容を変え働きやすい環境をつくる必要がある。また、実際に訴えた場合、職場にいつらくな

るのは仕方ない。

W 先生 : 小規模な職場でも相談窓口があるのか？

安孫子先生 : どんな職場も相談窓口を設けることが義務付けられている。職場で相談しづらい場合は労働局、労働基準監督署に相談と考えて良い。

K 先生 : 労働基準監督署は 5 時までなので、仕事をしながらだと相談しづらい。

安孫子先生 : 労働基準監督署では電話相談も受け付けてくれる。弁護士会ホームページに弁護士会の電話があり相談の予約が取れる。こちらは有料で 30 分 5000 円、お金がない人は無料で相談を受けられる。また、法テラスでは、どこに相談すればいいかを教えてくれる。

「最近の苦情に対する処理事例とその対応について」

報告：石沢恵理

出席者 渡邊、大木、荒木、松田知、柏倉、高橋寛、高桑、太田、
松田水、花田、大関、宮地、伊藤、石沢、今野、原田、浦山、本間、奥山、
芳賀、石井、片平、諸橋
欠席者 小林（学内） 白崎（出張） 高橋（日直）

[（注）本研修会は、山形県未来創造プラットフォーム（2019）関連事業の共同FD・SDとして実施された]

1. 日時 / 会場

令和2年2月13日（木） 14：30～15：30 / メトロポリタン山形

2. 講師

水上進法律相談事務所所属 山口将 弁護士

3. 研修会内容

●開催趣旨

近年、教育現場で学生や保護者からのクレーム内容が多様化しており、従来の対応では対処しきれないことがある。教職員の理解、学びが必要となるため今回のテーマにした。

●苦情の増加について

インターネットの普及により相談者が様々な情報を持っていることが多い。得た知識をもとにして、自らの権力を守ろうとする意識が強くなってしまふことがあり、お互いに歩み寄ろうとする姿勢が取れなくなるとクレーマー化してしまう場合がある。

第1、学校における危機管理（紛争の未然防止）

●学校の紛争の特殊性

1) 当事者

- ・学校法人、教員、事務職員、生徒、保護者、近隣住民と関係者が多数にわたるため個々に合わせて問題を考えていくことが必要。

2) 教育機関の特性

- ・教育的見地からの対応が求められる。問題が起きた場合、環境調整、学生へのケアなど教育機関としてのあり方が問われることになる。

3) 在学の継続性

- ・紛争中も解散後も当事者間の接触がありうる。紛争の火種が拡大、拡散する可能性もある。紛争が解決したら終わりではなく、ケアを組織的に行っていく。

4) 情報管理

- ・情報が錯綜し事実確認の特定が困難、混乱が拡大する可能性があるため、誰が情報を持ち、どのように管理していくのかを確認すること。

●私立学校における法的責任

- ・公立学校とは違い、教員の過失による責任を教員個人が負うこともある。

第2、クレーム対応

権利意識の普及から過大な要求は増加傾向にあり、有効な画一的対応の手段は見出しがたい。

●クレーム対応の基本的姿勢

①クレームの初期対応

最初の対応が重要となる。対応が雑になると事態收拾がさらに困難になる。

1、確認事項が何か

→感情的な部分ではなくクレイマーが認識している事実を確認する。

2、対応の窓口をどうするか

→窓口を一本化する。当事者とあまり関わりがなく、責任者ではないことが重要。

3、回答の方法

→相手の話をすぐに認めて安易に謝罪してはいけない。感情的になりそうになっても意見は言わない。

●クレーム内容に応じた対応

①クレームの連絡を受けた後、事実関係が確認できた場合

- ・非がある場合は、その事実に対してのみ謝罪をする。

②クレーム対応を受けた後、事実関係がはっきりしない場合

- ・事実関係を明らかにしないまま解決に向けた交渉をする。
- ・事実関係を確定して責任の所在を明確にしていく。

③クレームが常軌を逸している場合

- ・早々に結論を伝えて対応できないことを表示する。
- ・第三者（警察、弁護士）に相談する。

第3、事例検討

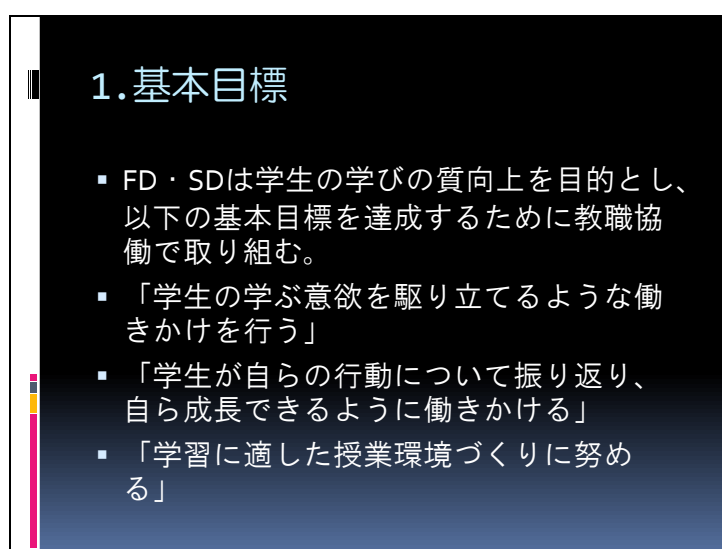
具体的な事例をもとに、対応の在り方について説明がなされた。

●生徒間のトラブル

- ・学校としてどこまで対応が必要か、最終的な解決としてどのような形が望ましいか学校側の調査を尽くして調査内容を開示する。保護者と協力体制を取ることもできる。

●生徒と教員間のトラブル

- ・生徒と教員、双方からの事実確認が必要。言い方、言われたことの受け取り方の違い等から食い違いが起こることが多い。



2.月目標

4月目標：「教職員側から積極的に学生と挨拶を交わす」
「各教員の年間FD教育目標を設定し、公表する」
テーマ：「平成30年度FD・SD事業計画、定例FD・SD懇談会
テーマについて」

5月目標：「学生の活動に積極的にに関わり、名前で呼べる新入生を増やす」
テーマ：「カリキュラム、クラス編成、授業時間割について」

6月目標：「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」
テーマ：「ゼミでの実習振り返りについて」（学友会参加）

7月目標：「学生が適切な身なりの認識をもつことができるような働きかけを行う」
テーマ：「校内美化について」（学友会参加）

9月目標：「年間目標の中間評価と修正を行い、課題を明らかにしよう」
テーマ：「学生の学修成果の評価方法について・授業評価について考える」（一年生参加）

- 10月目標：「学生とのコミュニケーションで分別ある使い分けができるような支援を行う」
テーマ：「学生募集、羽陽短大の広報について」10/25（木）
- 11月目標：「学習環境を整えるために何ができるかを考えよう」
テーマ：「実習報告会を充実させる方法について」11/29（木）（専攻科参加）
- 12月目標：「ゼミの活動を振り返ろう」
テーマ：「ゼミ、卒業研究で育てる能力について」12/20（木）
- 1月目標：「2年間、あるいは1年間の学生の成果を見つけて、褒めよう」
テーマ：「業務の効率を上げる方法を考える」1/31（木）
- 2月目標：「今年度の自らの教育活動を振り返り、課題を見つける」
「来年度に向けた明確な教育活動の展望を立てる」
テーマ：「シラバスの作成方法について—課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法—」
「FD・SD年間目標の反省」2/28（木）

スライド 5



スライド 6

3.事例①（6月の懇談会）

- 目 標
「実習体験について学生と話をし、学生の振り返りを支援しよう」
- テーマ
「ゼミでの実習振り返りについて」
6 / 2 8（木）（学友会参加）

スライド 7

懇談会内容

<グループ1>

- ゼミは、少人数のために一人一人の話を聞くことができ、いろいろな振り返りができる。
- 少人数のために、実習の具体的な様子が話しやすく、いろいろな振り返りができる。

<グループ2>

- 少人数のために、本音で話すことができる。
- ゼミでの実習の振り返りと友人同士での振り返りとの違いを、明確にすることが課題である。

<グループ3>

- 明るい楽しい雰囲気自由に話すことができるために、実習の事後指導と違った視点から振り返りと反省ができる。

スライド 8

<グループ4>

- ゼミごとに振り返りの内容や方法に違いがあった。授業でも振り返りを行っているが、振り返りの視点をどのように絞るか、振り返りを身近なことから絞るかなど方法はいろいろあると考えられる。個人的（発表者）には、視点を絞るための資料を配布したが学生の読み込み不足が課題であった。

<学生の感想>

- 普段話す機会の少ない先生と話すことができた。
- 今回参加して、改めて振り返ることができた。
- 先生方の指導の意図がわかり、その苦労が分かった。
- 事後指導とゼミでの振り返りでの視点の違いが分かった。

<まとめ>

- 普段のゼミ活動は、ゼミごとにテーマを決めて実施しているが、今回のように、テーマを決めて少人数を活かす学生指導を検討してはどうか。

4.事例②（11月の懇談会）

- 目 標
「学習環境を整えるために何ができるか考えよう」
- テーマ
「実習報告会を充実させる方法について考える」

11 / 29（木）（専攻科参加）

懇談会内容

<グループ1>（専攻科）

- 事前に、学生への実習報告会の目的や具体的な内容等の情報を伝えてあると、学生も目的を持って参加できるのではないか。
- 発表内容については実際の事前準備の内容や、実習の具体的な内容を伝えることによって、聞く学生自身の事前準備に活かせるように、分かりやすい情報提供の在り方を工夫する必要がある。

<グループ2>（専攻科）

- 発表者側への対応として、具体的に学んだことを発表できるように、レジメや発表内容についての指導をしていくことが大切である。
- 聞く側への対応としては、特に2年次については自分の体験と関連づけて聞くような指導が必要。
- 会の在り方については、分科会の内容を全体で集まって発表する、ローテーションしながら聞く等全体の内容が分かるような工夫も必要なのではないか。

<グループ3> (専攻科)

- 参加者にとっては参考になる内容となっている。
- 分科会の人数も多い、少ないがあり、学生のモチベーションにもばらつきが見られる。
- 2年生からの意見を引き出す工夫が必要である。(専攻科では一人一人から聞き、指導してる。)

<グループ4> (専攻科)

- 1年次対象の報告会は、実習への不安が和らげられる等、事前の具体的な情報場として有効である。
- 全体の報告会については、2年間の実習の総まとめとしての位置づけと捉えると、2年生の参加の姿勢は意欲的とは言えない。2年間の実習の流れをデザインし直してみる必要があるのでは。
- 発表者を増やしたり、討論する場を設けるなど、主体的な学びの場となるような工夫が必要である。

<参加学生の感想>

- 実習報告等も含め様々検討しながら進めていることが分かった。報告会へも積極的に参加したい。

<まとめ>

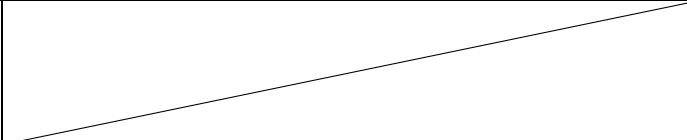
- 主体的な学びの機会となるよう、事前の指導や分科会の持ち方については継続して検討し、より充実した実習報告会へ向けて工夫を重ねていく必要がある。

5.課題

- ①テーマの見直しを怠らず、適切なテーマを設定する。
- ②実効性のある改善策に結び付ける。

令和元年度教員個人目標に対する自己評価

役 職	学長・ 教授	教員名	<u>渡邊 洋一</u>
－授業としての取り組み目標－			
<p>本学の教育における担当授業の意義を学生に伝え、資格免許の取得に直結していないように見える授業も、成長する上で重要な意義のあることを理解してもらえることが目標である。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>毎回の授業で、授業内容の理解度と学生自身で気がついた課題などの記述を求めているが、課題発見にまではなかなかうまく導けない回も少なくなかった。</p>		<p>15回の授業の特にはじめの方で、考え方や課題発見の意義と着眼点のを見つけ方などの教育にももう少し時間をかけたい。</p>	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>できるだけ学生の名前と顔を覚え、授業のねらいが各人の希望実現に役立つよう、丁寧な指導を心がけたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>7名の職業訓練生をゼミ担当として指導し、全員が卒業論文を仕上げることができたが、個別の指導に時間を割くのが不十分だった学生もいた。また、ゼミ以外の学生とどこでどのように関わるか、まだ模索中である。</p>		<p>次年度は8名の職業訓練生の卒業論文を指導する予定であり、個別の特性・事情に合わせた指導を心がけたい。またゼミ以外の学生ともできるだけ会話の機会を増やしたい。</p>	

役 職	教授	教員名	<u>大木 みどり</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・実際の保育・教育活動場面、対象年次等をイメージした活動内容や活動のプロセスを配慮して授業を進める。 ・学生が自ら考え、活動する場面を多くし、主体的な学びに繋げることが出来るよう活動の展開を工夫する。 ・グループ演習活動の充実を図る。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>様々な素材との関わりから、活動（遊び）を引き出し、対象児・者や状況、ねらいに応じた活動内容と展開、また具体的な配慮事項等も考</p>			

<p>え、演習活動を行えるよう授業内容の工夫を心がけた。演習活動の振り返りシートからは評価できる点や課題などについて適切な読み取りがなされている。学生自身が体験を通して考え、理解し、理論化し身につけていくことが必要かつ重要であり、その場面を多く設定することや課題への提示の仕方等の工夫が必要であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演習活動の計画や実践の準備等については、授業時間内に組み込むなどの必要性を感じる。 	
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も学生への積極的で丁寧な関わりを心がけ、学生自身が学びや様々な活動の主体であることを意識して取り組むことができるような環境作りや関わり、援助の仕方等について工夫していく。 	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・授業・クラス活動・ゼミ活動・サークル活動・様々な行事等において、学生と積極的で丁寧な関わりを心がけ、楽しむことができた。 ・2年という期間やタイトな授業時間割の中で、サークル活動時間の確保、1年次への引継ぎ等はますます困難な状況が懸念される。コミュニケーションを密にし、次に繋がるよう記録などをしっかりと残すような指導が必要であった。 	

<p>役 職</p>	<p>専攻科主任・教授</p>	<p>教員名</p>	<p><u>荒木 隆俊</u></p>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・基本は例年同様、マニュアル化した専門職者を育てるということではなく、将来に向けて今何が必要か、どんな視点が介護支援に必要なのかといった点に触れ、特に「<u>命・生きる</u>」ということについて考えさせるような授業を心がけ、介護、幼児教育双方に共通する視点を身につけられるような授業を心がける。 ・介護福祉士国家試験全員合格を目指して意識を高める努力をしていく。 			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・授業については目標に沿った授業を心がけ実施したが、理解の程度という点では、個人差が出てしまった。もう少し、わかりやすい授業を進めていくための工夫と努力をすべきであった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・授業の柱は、今年度と同様に進めていくつもりであるが、理解の程度については、適宜、確認をしていく。 ・介護福祉士国家試験対策としては、学習意欲を早い段階から持つよう進めていく。授業以外の時間も教 	

<ul style="list-style-type: none"> ・介護福祉士国家試験に向けての準備は、早い段階から意識づけを行うために、グループによる学習の機会を設けたが、今年度は全く機能しなかった。原因は、個々の学習スタイルにもあるようだが、個々の学生に任せきりではいけない。いかに学習意欲を高めるかが課題である。 	<p>室等に出向いて、学生の様子や意見を取り入れながら見守るようにしていく。</p>
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・個々の目標を具体的に把握し、それに向けた助言ができるよう、対話を大切に関わる努力をしていく。 ・介護福祉士国家試験合格を目標に、年間を通じて授業時間以外の学習ができる意識を持たせていく。 	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・各学生は授業・クラス活動等、様々な場面で関わる機会を多く得ることができたことにより、特に後期は、個々の学生の良いところを確認できた実感が持て、適宜、学生の個性や努力を認め励ませたと思う。 ・様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会活動等において、担当学生や中心学生は積極的に活動に参加し進めてくれたが、一部の学生に限られ、それ以外の学生の協力を得ることが難しい場面も見られことが残念であった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生が気軽に研究室を訪問したり、相談したりできるような環境を整え、学生個人への丁寧な関わりと共に、様々なクラス活動や行事、サークル活動や委員会活動等が協力的にまた円滑に行われるように、連絡を密にしながら随時相談に乗ったり、自ら出向いたりという姿勢を持つよう努力していく。

<p>役 職</p>	<p>図書館長・ 教授</p>	<p>教員名</p>	<p><u>柏倉 弘和</u></p>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<p>知識や理解をもとにして自分で考える場面を、授業の中に多く取り入れることにより、自分で工夫しながら保育実践を考えられる力を育てる。</p>			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<p>自分で考える場面をなるべく多く設定することはある程度できたが、考えることは十分ではない。しっかり考えている学生とそうではない学生との差が感じられた。学ぼうとする気持ちをもっと高められるような手立てを考えたい。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ・学ぼうとする気持ちを高めるために、できるだけ実際の保育に関わる内容を取り上げ、意欲を引き出していく。 ・保育の実践とは、幼児に知識等を教えることではなく、幼児の興味や好奇心、発達段階など、個性や状況に応じて最もふさわしいと思われる活動を考えていくことである。幼児の実態に合わせて考え、組み立てていくことが重要であるということに、実践の記録等を学習材として用いながら気づかせたい。 	

－学生とのかかわりとしての目標－	
授業以外の様々な場においても、学生の皆さんといろいろ話をするにより、前向きで楽しい学生生活が送れるように手助けをする。	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
授業での関わりがほとんどで、それ以外はゼミや実習指導くらいであり、あまり関わる機会がなかった。もっと学生の皆さんの声を聞く場を増やしていきたい。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 昼休みや空き時間を有効に使って、図書館や教室に行き、学生の皆さんと関わる場面を作りたい。 ・ スポーツ祭や学園祭を通して、授業とは違う学生の皆さんの姿に触れたい。

役職	教授	教員名	高橋 寛
－授業としての取り組み目標－			
<p>例年のことではあるが、教員の言葉、歌声、ピアノの演奏などのアナログな「耳からの情報」に注意を向けさせ、「聴き取る、書き取る、記憶に残す」という作業を必要とするような教材を更に改案し、そのような授業の進め方を充実させる。これを指向することは、担当教科以外の学生指導という側面にも有効であるはずだ。本学の卒業生たちの就職先から『ピアノをもっと弾けるようになってきて欲しい』との意見が多く寄せられている昨今、「歌うだけ」「ピアノを弾くだけ」のスキルでは、幼児教育の現場では適応できない。スキル・アップすることの喜びを実感できる授業の実施に努める。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
概ね目標は達成できたと思われる。もう少し担当科目以外のスケジュールが緩やかだと嬉しいが、こればかりは自由にならないとあきらめている。		今年度同様にひたむきに努力し、学生たちの将来に寄与できるようにしたい。	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<p>最近の学生に多く見られる「自分なりに社会のルールを改変して生き抜こうとする」姿にはけっして同調しない。学生たちにとっての「もっとも身近な社会人」としての立場をこれまで同様に重視し、適度な礼節は確保しつつ「高圧的な教師でもなく、我関せずの大人でもない」ことを基本のスタンスとしたい。</p> <p>また、舞台に立ち続けるプロの現役（歌手・役者・演出家・合唱指揮者・・・）として、日常の体調管理や、あるべき対外との交渉術などを、機会あるたびに学生に公開し、または企画への参加・共演を促し、よき見本となるように努める。</p> <p>フットワークを軽く、思考を柔軟に、精神は実直に、大人としても「人生を前進する」姿勢を示していきたい。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
多忙ではあったが、ほぼ目標を達成できたと感じている。		今年度と同様の目標設定にしたいと思っている。	

役 職	教授	教員名	<u>高桑 秀郎</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> 適切な授業環境を維持できるよう働きかける。 論述問題の要点等を伝えながら、それを学生が再出力できるような働きかけを工夫していく。 点呼時の挨拶・返事の重要性を説く。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> 授業環境の維持については、学生の私語等については、それなりにコントロールできたと思う。しかし、隠れてスマートフォンを使おうとしたり、授業開始後にも関わらず、ノートをとる準備をしないものなどが居たりして、個別に注意を促していきたい。 論述問題について、昨年度より丁寧に行い、定期試験前に事前添削などの指導を行った学生については書けるものが多かった。添削を受けるものを増やすようにしたい。 点呼時の挨拶・返事については、クラスにより、後期に差が出てきた。 		<ul style="list-style-type: none"> 今後も、私語等については注意を促す、スマホ等の使用については授業開始前に注意を促したうえで、見つけたらその都度、注意することを行っていく。ノートも出して書くよう促す。 初めから書くのを諦めているような学生を減らすような働きかけを行う。 事前添削に来るような促しを行う。 幼児教育や保育、介護分野では重要なコミュニケーションの一つであることを訴える。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> 学生指導については、自分のみの独善的な指導にならないよう、他の教職員と情報を共有して進めていく。 学生が自立し、主体的に考え、行動できるような働きかけを行う。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> 指導過程に置いての情報共有は上手く回れたと思う。できるだけ、指導前・後に他教員と相談、連絡、報告を密に行うよう心掛けた。指導の際に、指導内容等を歪曲して伝えるケースが見られたので、複数での指導を視野に入れる。 言い方がきついと他教員に指摘されているようなので、若干、考慮する。 		<ul style="list-style-type: none"> 今年度同様、指導においては、他教員との連携を図りながら進める。 言い方等工夫してみる。 	

役 職	学生部長・ 教授	教員名	<u>松田 知明</u>
－授業としての取り組み目標－			
授業の理解を確認することを心がけて、授業後のフィードバックの方法も含め検討したい。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	

<ul style="list-style-type: none"> ・毎回提出されたレポートから、授業の理解を確認し、次回の授業で補足説明や追加資料を配布することができた。さらに、科目に関連する時事問題も取り扱うことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を通して、コミュニケーションの意義を考える機会を増やすように努め、その効果を確認するように心がけたい ・来年度は新型コロナウイルスによる授業の急な変更も予想されることから、それらに対応できるように心掛けたい。
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>	
<p>仕事の配分と効率化を図り、学生への支援の時間を確保するように努めたい。</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<ul style="list-style-type: none"> ・学生とのコミュニケーションを深め、適切な支援ができるように心がけた。しかし、繁忙な時期には十分対応できなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の配分と効率化をはかり、学生への支援の時間を確保するように努めたい。 ・来年度は新型コロナウイルスによる学事暦等の急な見直しも予想されることから、状況に合わせた支援をしたい。

<p>役 職</p>	<p>学科長・ 教授</p>	<p>教員名</p>	<p><u>太田 裕子</u></p>
<p>－授業としての取り組み目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解と定着、学習内容の保育との繋がり理解促進を目指し、保育現場における具体例提示等の工夫を施しながら、授業を実施する。 ・学生の提出物に対して助言等を書き込み返却することで、学生の授業の理解や取り組みに関する適切な現状把握、学生の学修意欲の向上に繋げていきたい。 			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・テストの結果などから、学習内容の理解については一定の定着ができたように思う。一方で、保育との繋がり理解を促進することは難しかったと感じている。 ・授業態度、提出物の内容から、学生の現状を把握し授業のスピードや内容を微調整しながら授業を進めていくことはできたように思う。半面継続的な個別コメント記述は難しかった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・学習内容の理解に関しては、核となる部分を繰り返し学ぶ機会を設ける。保育との関連性を理解することは難しいことだが、具体的な事例提示等により、保育との繋がり理解を進めたい。 ・講義形式の授業では学生が受け身になる傾向が強いが、ペーパーを通して、或いはグループ討議を取り入れて、アクティブラーニングの要素も意識的に盛り込んでいきたい。学生の提出物にコメントを書き込み返却する等の個別対応は必要なものとの認識が依然として強い。年間を通しての実施は難しい面もあるが、極力実現していきたい。 	
<p>－学生とのかかわりとしての目標－</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が人と接することの楽しさや安心感を持てるよう、業務の効率化を図り極力時間を確保して、各 			

学生の個性や現状に合わせた一人ひとりとの関わりを重視する。それぞれの希望に沿った進路決定実現に向けて、丁寧に対応していきたい。	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
・業務の能率化に難があり、学生と関わる時間を確保できないジレンマがあったが、限られた時間の中で、学生生活における不安に共感するなどの可能な限りの努力はしたと思う。希望の進路決定、実現の支援も行えたように思う。	・業務の効率化、時間の捻出には難しい面があるが、個別な関わり的重要性、有効性は大きいと実感していることから、引き続き、できる限り細やかな関わりを心がけていきたい。学生の個性を念頭に置き、個性に応じた関わり方を考慮しながら関わっていきたい。

役職	准教授	教員名	小林 浩子
－授業としての取り組み目標－			
英語（外国語）は、自力で辞書等を使って試行錯誤するなかで、日本語にはない英語特有の思考方法や文化的・歴史的背景にまでふれることができる科目なので、安易に翻訳機等の他力を使い日本語訳結果だけをみてよしとするのではなく、地道に辞書を使って訳し、さらにより日本語的な言い回しに翻訳することを学生に課していきたい。学生達に地道に辞書を使用して和訳させる、英文法等をわかりやすく教え直すことを引き続き行っていきたい。			
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策		
ほとんどの学生が辞書を使用しての英文和訳、英文法の復習に頑張っており取り組んでいた。特に訓練生達は授業中や終了後に毎回わからないところを質問するなど、授業態度が良く、定期試験結果にもその成果が現れた。訓練生の熱心さに、そのクラスの学生が良い影響を受けていたようである。 中学生の段階で英語がわからなくなり、それを放置した結果ますますやる気をなくしている学生にどう対処していくかが今後の課題と思われる。	学生に辞書を使用して和訳させる、英文法等をわかりやすく教え直すことを引き続き行っていきたい。		
－学生とのかかわりとしての目標－			
学生達にできるだけ個別に声がけをし、時間をかけて問いかけること、質問に答えることを続けていきたい。 今なぜそれをするのか、今なぜそれをしてはいけないのか…英語の授業に限らず、他の授業や学生生活にも共通することだが、威圧的に禁止するのではなく、学生がその理由を理解でき、行動に移せるような指導方法を考えて実施したい。			
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策		
授業中は学生達にできるだけ個別に声がけをし、時間をかけて問いかけたり質問に答えること	引き続き、学生達へのこまめな声掛け・辞書の引き方指導・英文直訳から自然な日本語に訳する指導をし		

をした。結果、英語が苦手と言っていた学生たちが定期試験で良い成果を出せた	ていきたい。
--------------------------------------	--------

役 職	准教授	教員名	<u>松田 水月</u>
－授業としての取り組み目標－			
介護福祉士国家試験全員合格のために、ただ暗記し覚える講義ではなく、自分自身の「こころとからだのしくみ」と関連付け、興味・関心を持ち自ら学びたいと思う授業に心がける。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
昨年度の実践も勘案し、今年度早くから雑誌、ネット、スマホアプリ、参考書等々の情報を学生と共有し学習を行っていった。学生一人一人、関心を持つツールが違うので、どのツールを使いどのように学習していくかを見つけるまで時間がかかった。その後興味、関心を維持するために学習ノート等を作成し、連日提出、コメントなど細やかな対応の結果、学生の反応は良かったと感じる。やはり、学生個個人の情報分析と、個人ごとの具体的な個別受験プランの必要性を強く感じた。また、次年度社会人としてのマナー等の教育も必然であると感じた。		<ul style="list-style-type: none"> ・一年という短い期間で、多くの知識技術を学ぶには、まず早期に学生自身を把握し、情報を分析し学生自身にあった多様な学習方法を提供する。 ・講義についても、映像や視覚、聴覚等興味を持ち学習できるような環境に心がける。 ・この学習が、なぜ必要なのか、保育や介護にどのように繋がるのか、根拠を明確にし、理解しやすい授業に心がける。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
何を考え、何を思っているのか。何を悩んでいるのか不安は何かなど、個々人の課題を明確に共有し解決できるよう取り組みたい。専攻科に来てよかったと思ってもらえる1年にしたい。			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
介護福祉士国家試験合格という大きな目標を掲げながらも、個別性のある学習方法を模索しながら、最終的にはほとんどの学生が真剣に目標に到達することが出来たのではないかと。しかし、どうしても学習が苦手な学生にどのように介入していけばいいか悩んだ事例もあった。学校だけでは限界がある。家庭学習についても保護者も含めた指導法を検討していく必要性も考察すべき。学生生活分野についても、学生の様子を観察し、別の視点の考え方等の助言など、次年度は社会人を意識して関わりを持つことが出来た。		入学して間もなく実習、そして就職活動・国家試験対策と息をつく暇がないほど過密なスケジュールの一年になることが予想される。それらの対策はもちろんのこと、学生自身の状況を把握し、早期から学生と意思の共有を図れるよう、学生との連絡を密にとり、関わりを出来るだけ多く持ちたい。	

役 職	准教授	教員名	<u>花田 嘉雄</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生個々の良い点や個性的な発想を見つけたら、その場で褒めるように心掛ける。また、色々な表現や価値観を受け入れ、他の作品にも興味を持てるように、鑑賞や発表の方法を工夫する。 ・授業の意義が伝わるよう意識し、話し方を工夫する。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・これまでグループ発表の際、自グループの発表のことで精一杯になっており、他グループの発表をあまり聞いていない学生の様子が散見されていた。そのため、他グループの発表についてのコメントを次に発表するグループの学生（ランダムに指名）に述べてもらう試みを一部のクラスで行ったところ、比較的聞く姿勢が保たれた。次年度は、全クラスこの方法でグループ発表を行いたいと思う。 		<ul style="list-style-type: none"> ・グループ発表の際は、他グループの発表についてのコメントを次に発表するグループの学生（ランダムに指名）に述べてもらうことにより、他グループの表現や価値観を自身の参考として受け入れやすい環境をつくるようにする。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・時と場合、人間関係によって言葉を遣い分けるよう声掛けする。また、自分自身の言葉遣いについても、気楽過ぎないように気をつける。 ・傾合いを見ながら、学生が自ら考え、責任を持って行動できるような働きかけをする。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度も、自分自身の言葉遣いを改める意識が十分ではなかったと反省している。 ・学生が自ら考え、責任を持って行動できるように働きかけるタイミングは意識しているが、効果的にできたかどうかは不明である。 		<ul style="list-style-type: none"> ・学内の言葉遣いと実習先等学外での言葉遣いの違いを、意図的に学生の前で示すようにする。 ・他の教職員の話をする際に、自分も学生も敬称を使うよう心掛ける。 	

役 職	准教授	教員名	<u>大関 嘉成</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート等への知識のアウトプットを求める際は、経験則を創り出すことをその事例として用いながら、帰納する方向での思考の型を提示することで、事象を理論に基づき考察する視点を身につけさせたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>授業では今年度もタームの紹介に合わせ、日常生活場面や実習後には経験したと思われる実習場面をできるだけ紹介した。そして課題においては、「専門用語→事例」として記述する課題、逆</p>		<p>課題遂行にあたっては、情報収集の手段のほとんどがスマートフォンを介したものになっている現状がある。語句や漢字を調べる程度のものから、場合によっては他者の意見や事例等を、その内容の検証や吟味</p>	

<p>に「事例→専門用語」として記述する課題を設定した。特に後者では、帰納する方向での思考の型を提示し、レポートにて、現実の事象を理論に基づき考察するというスタイルでのアウトプットを求めたが、課題の性質上、解答が一方向に固定されてしまうきらいもあり、課題目的の達成が疑わしい事後感を抱いた。この点は筆記試験での実施であれば多少は改善されるであろうが、そもそも、ある事象を比較的固定化されてしまった視点に誘導するような課題の有用性にも疑問を抱くに至った。</p>	<p>もなく転記したと思われる程度のものまでである。インターネット使用の禁止や引用のルールを伝達しての対応となっている場合が多いが、逆にインターネット上の情報に積極的に接触させ、それらの情報を授業ノート、書籍等も踏まえて吟味させる課題を出すことにより、リテラシーの一側面を伸ばしたい。</p>
--	--

—学生とのかかわりとしての目標—

- ・スマートフォンのツールとしての扱い方を模索する。
- ・見通しをもって物事に取り組めるようにする。

今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<p>「Instagram」においては、自身に関することや他者を被写体として個人的に撮影したものをアップする行為が日常化している。SNS におけるトラブルの事例を紹介したり、実習指導では厳重注意を行ってはいるが、禁止事項に関しても徹底できない場合もあった。特に実習内容等を SNS で公開してしまう問題に関しては、各実習の度に繰り返し伝達し、実習先の信頼も失わないよう厳格に管理せねばならないだろう。</p> <p>今年度も教員側が細やかに「マイデッドライン」を設定すれば、学生はほぼ忠実にその通り遂行してくれた。しかし、自らその設定が行えるようにはならなかった。</p>	<p>スマートフォン使用の弊害を授業で紹介したり、依存を学習させられていることを伝達したりすると、自戒するフィードバックが学生から得られはするが、学生自身がその使用をコントロールできるかは別問題である。本学で、授業でのスマートフォン使用を基本的に禁止するようになったところ、大分徹底されているように感じる。しかし、1年次前期における1日の使用時間は平均240分前後であることから（筆者調べ、2017、2018、2019）、授業外では多分に使用されている。スマートフォンのツールとしての使い方と並行して、学生自身の時間の使い方に関して、問題提起を行っていきたい。このことは、見通しをもって物事に取り組むこととも関連するだろう。</p>

役職	講師	教員名	<u>宮地 康子</u>
—授業としての取り組み目標—			
<p>学生の理解度や学習の進行度が異なるため、学生一人ひとり状況を把握し、使用する参考書等や課題、配布物等を教員間で検討し、段階に合わせた学習ができるように配慮する。</p> <p>学生が主体的に学ぶことができるよう、早期に学習習慣を身につける働きかけを行う。</p>			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<p>早い段階から一人ひとりの学習意欲を向上させることは難しいと感じた。</p>		<p>一方向の授業ではなく、学生自身が意欲をもって学習できるような授業内容（文字ばかりではなく、図や</p>	

<p>学生の理解度を考慮し、把握しながら、勉強することが楽しいと思ってもらうような資料作りや授業の展開(苦手な部分の強化や幼教からの繋がりを持たせた授業等)を考える必要があった。</p>	<p>絵等を効果的に用いる等)を工夫する。学生一人ひとりの興味・関心を引き出し、学習することの楽しさや達成感を感じてもらえるようにきめ細やかな指導を心掛けていきたい。 そのためには日頃の関わりを大切にし、意識的にコミュニケーションを図っていきたい。</p>
<p>ー学生とのかかわりとしての目標ー</p>	
<p>学生一人ひとりとのコミュニケーションを大切にしながら、学生が抱える課題を把握し、解決に向けて支援する。 クラス全体で、学生が主体となって国家試験や色々な行事等乗り越えていけるように、適宜声かけを行い、支援する</p>	
<p>今年度の反省</p>	<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>
<p>学生一人ひとりとコミュニケーションを図ることを心掛けたが、学習意欲を早い段階で引き出すことは難しかった。学生自ら考え、行動に繋がるようなアプローチの方法を工夫する必要があった。 グループ学習について、学生間で教えることや教わることで効果的に学習成果に繋がり、クラスの士気が高まるということが伝わりにくいと感じた。 グループで取り組む課題を考慮し、提供すること等、関わりを変えていく必要があった。</p>	<p>過去の先輩の学習方法(成功したことや改善点等)を提示し、具体的な情報を伝えながら、自分自身の学習スタイル(生活面も含め)を早い段階からイメージさせる。伸びている点に関しては意識的に褒め、また伸び悩んでいる時期には一緒に考え、学習意欲が低下し、諦めることのないよう最後まで関わりを大切にしていきたい。 グループ学習について、個人学習では進みにくいような苦手な分野等の課題を選択する等、学習成果に繋がるように配慮していく。</p>

<p>役 職</p>	<p>講師</p>	<p>教員名</p>	<p><u>伊藤 和雄</u></p>
<p>ー授業としての取り組み目標ー</p>			
<ul style="list-style-type: none"> ・保育に加え介護、福祉分野への興味、視野を広げられるものの見方、捉え方ができるように取り組む。 ・理解不足が一つでも少なく、一つ一つの積み重ね、努力する事の重要性を感じとれるよう工夫をし、介護福祉士国家試験の全員合格を目指す。 			
<p>今年度の反省</p>		<p>次年度に向けた具体的な打開策</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ・保育施設、高齢者福祉施設の複合施設の増加、互いの交流においてどのようなメリットがあるのかを数多くの事例等を提示できなかった。 ・介護福祉士国家試験の自己採点において、社会の理解、障害の理解の点数が伸びなかった。合格点に達しない学生がおり全員合格とはいかなかった 		<ul style="list-style-type: none"> ・保育施設、高齢者福祉施設の複合施設の増加、互いの交流においてどのようなメリットがあるのかを福祉新聞や文献等から数多くの事例等提示する。 ・個人の状況を把握し、何が理解できないか、できていないかを授業後の振り返りプリントや模擬試験結果を踏まえて確認をする。 	

－学生とのかかわりとしての目標－	
<ul style="list-style-type: none"> ・現場での実務経験をいかし社会人として、専門職人として何が大切か、求められているかを意識し積極的にコミュニケーションを図る。 ・悩みや、精神的負担が少しでも軽減できるようよく話を聞く。 	
今年度の反省	次年度に向けた具体的な打開策
<ul style="list-style-type: none"> ・授業だけでなく、ゼミ、サークル、委員会等をとおして多くの学生と積極的にかかわりを持ちコミュニケーションを図ることができたと思う。 ・なぜ、報告・連絡・相談が大切なのかのなぜの部分十分に伝わらなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業だけでなく、ゼミ、サークル、委員会等をとおして多くの学生と積極的にかかわりを持ちコミュニケーションを図る。 ・報告・連絡・相談等の大切さを、その時々イメージしやすいようにヒヤリハットからの事例等を含めてコミュニケーションを図る。

役 職	講師	教員名	<u>白崎 直季</u>
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が主体的に取り組めるような働きかけをする。 ・楽器を弾く楽しさを感じてもらい、音楽の基礎的な部分を丁寧にわかりやすく伝えられるようにする。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ピアノの授業に関しては、より個人と向き合えるということもあり、個性を見ながら課題を出すことができるため、概ね学生が主体的に取り組んでくれたように思う。しかし、グループでの授業においては、積極的に取り組む学生とそうではない学生の差が出ているように感じた。また、音楽の基礎的な知識の習得においてはまだ足りないところがあったように感じる。短い時間の中で、技術と知識を習得するバランスを取っていく必要があった。 		<ul style="list-style-type: none"> ・グループでの授業では、全体に目を配りながら、積極的に参加できるような取り組みを展開する。 ・授業時間内に基礎的な知識と技術の習得のバランスを取っていく。 	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・学生が自分で考え、行動していけるように促していく関わりをする。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、教員からあまり事前にお膳立てしすぎないような関わりを心掛けたところ、学生もそれぞれ自分たちで考えながら行動していたように感じる。 		<ul style="list-style-type: none"> ・次年度以降も学生自身で行動できるような関わりをしていきたい。 	

役職	講師	教員名	石沢 惠理
－授業としての取り組み目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図画工作（一年次）については、表現することの楽しさを感じてもらえるような授業づくりを目指す。また、造形あそびを通して感じ・考えたことを振り返ることで、授業での学びを深めたい。作品集（スケッチブック）が保育案での参考になり、学びの記録になるようにしていく。 ・ 図画工作Ⅱ（二年次）については、造形表現が身体、音楽など他の表現へと広がることもふまえて、造形表現の内容を深められるようにしたい。活動の記録を学生自身が気軽に取っていけるような仕組みを考えたい。 ・ 保育実践研究Ⅱについては、学生が活動を振り返り、改善案を考えられることに重点を置きたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1年次の図画工作では、4月にグループワークを多く取り入れたこともあり、学生間の緊張感を和らげ授業に集中しやすい環境をつくることができた。 ・ 2年次の図画工作では、造形活動だけでなく音楽、言葉など様々な表現活動と連動して活動を展開することを意識した。しかし、学生が授業での体験を自らの学びにしていくために、ふりかえりの方法に工夫が必要だと感じた。そのため、保育実践研究Ⅱで行ったように、ドキュメンテーションを活用していくことが重要だと感じた。 		/	
－学生とのかかわりとしての目標－			
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生と直接関わりあう機会を多くつくり、ひとりひとりの個性を理解する。 ・ 学生がより主体的に学びの機会に参加できるように、環境づくりや支援のあり方について、学生とのやりとりの中で作り上げていきたい。 			
今年度の反省		次年度に向けた具体的な打開策	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の名前を覚えられるように、授業やゼミで名前を呼びながらやりとりすることができた。 ・ ゼミや実習事前事後指導で、一人ひとりが発表する場面を設けた。学生の発表から学べるように板書し、意見を可視化することを意識した。 		/	

令和元年度 卒業時満足度調査

		問①			問②			問③			() は昨年度の値			
		答	人数	%	答	人数	%	答	人数	%	答	人数	%	
短大の施設、設備、備品の充実度について	非常に満足	26	27.4%	(25.0%)	短大の施設、設備、備品の使いやすさについて	非常に満足	28	29.5%	(24.2%)	短大の授業、教育課程全般について	非常に満足	34	35.8%	(30.8%)
	やや満足	59	62.1%	(63.3%)		やや満足	63	66.3%	(66.7%)		やや満足	58	61.1%	(67.5%)
	やや不満	9	9.5%	(10.0%)		やや不満	4	4.2%	(7.5%)		やや不満	3	3.2%	(0.8%)
	全く不満	1	1.1%	(0.8%)		全く不満	0	0%	(1.0%)		全く不満	0	0%	(0.0%)
	平均	3.16	(3.13)	(無回答)		0	0%	(0%)	平均		3.25	(3.15)	(無回答)	0
		問④	答	人数	%	問⑤	答	人数	%	問⑥	答	人数	%	
専任教員の授業について	非常に満足	49	51.6%	(39.2%)	非常勤教員の授業について	非常に満足	31	32.6%	(22.5%)	ゼミ活動とゼミ指導教員の指導について	非常に満足	53	55.8%	(50.8%)
	やや満足	43	45.3%	(57.5%)		やや満足	53	55.8%	(60.8%)		やや満足	32	33.7%	(44.2%)
	やや不満	2	2%	(3.0%)		やや不満	10	10.5%	(15.0%)		やや不満	6	6.3%	(3.3%)
	全く不満	1	1%	(0%)		全く不満	1	1%	(1.0%)		全く不満	2	2.1%	(0.8%)
	平均	3.47	(3.37)	(無回答)		0	0%	(0%)	平均		3.20	(3.06)	(無回答)	0
		問⑦	答	人数	%	問⑧	答	人数	%	問⑨	答	人数	%	
クラス担任の指導について	非常に満足	64	67.4%	(42.5%)	事務室職員の対応全般について	非常に満足	59	62.1%	(52.5%)	学校行事について	非常に満足	35	36.8%	(42.5%)
	やや満足	27	28.4%	(40.0%)		やや満足	33	34.7%	(45.8%)		やや満足	54	56.8%	(53.3%)
	やや不満	4	4.2%	(7.6%)		やや不満	3	3%	(1.0%)		やや不満	6	6.3%	(3.3%)
	全く不満	0	0.0%	(8.3%)		全く不満	0	0%	(0%)		全く不満	0	0.0%	(0.0%)
	平均	3.63	(3.19)	(無回答)		0	0%	(1%)	平均		3.59	(3.52)	(無回答)	0
		問⑩	答	人数	%	問⑪	答	人数	%	問⑫	答	人数	%	
授業以外の課外活動について	非常に満足	31	32.6%	(35.0%)	自分の専門職としての技能の向上について	非常に満足	33	34.7%	(35.6%)	2年間(もしくは3年間)の自分の過ごし方や成長について	非常に満足	45	47.4%	(41.7%)
	やや満足	60	63.2%	(60.0%)		やや満足	56	58.9%	(59.2%)		やや満足	47	49.5%	(55.0%)
	やや不満	4	4.2%	(3.3%)		やや不満	5	5.3%	(4.2%)		やや不満	2	2.1%	(2.5%)
	全く不満	0	0.0%	(0.8%)		全く不満	1	1%	(0.0%)		全く不満	1	1%	(0.0%)
	平均	3.28	(3.30)	(無回答)		0	0%	(1%)	平均		3.27	(3.32)	(無回答)	0
		問⑬	答	人数	%	問⑭	答	人数	%	問⑮	答	人数	%	
友人たちとの出会いについて	非常に満足	71	74.7%	(72.5%)	教員との授業以外での関わりについて	非常に満足	62	65.3%	(52.5%)	事務職員との関わりについて	非常に満足	50	52.6%	(41.7%)
	やや満足	23	24.2%	(24.2%)		やや満足	33	34.7%	(45.8%)		やや満足	41	43.2%	(55.0%)
	やや不満	0	0.0%	(2.5%)		やや不満	0	0%	(1.0%)		やや不満	4	4.2%	(2.5%)
	全く不満	1	1.1%	(0.0%)		全く不満	0	0%	(0%)		全く不満	0	0%	(0.0%)
	平均	3.73	(3.71)	(無回答)		0	0%	(0%)	平均		3.65	(3.52)	(無回答)	0
		問⑯	答	人数	%	問⑰	答	人数	%	問⑱	答	人数	%	
就職活動への支援について	非常に満足	55	57.9%	(41.7%)	トラブルを抱えた際の教職員の緊急時の対応について	非常に満足	51	53.7%	(34.2%)	学生生活全般について	非常に満足	56	58.9%	(50.0%)
	やや満足	36	37.9%	(55.0%)		やや満足	41	43.2%	(61.7%)		やや満足	37	38.9%	(49.2%)
	やや不満	3	3%	(3.0%)		やや不満	2	2.1%	(1.7%)		やや不満	1	1.1%	(0.0%)
	全く不満	1	1%	(0.0%)		全く不満	1	1%	(2.0%)		全く不満	1	1%	(0.0%)
	平均	3.53	(3.39)	(無回答)		0	0%	(0.0%)	平均		3.49	(3.29)	(無回答)	0
		問⑲	答	人数	%	問⑳	答	人数	%	問㉑	区間	人数	%	
日常を過ごす環境としての短大について	非常に満足	58	61.1%	(50.0%)	羽陽学園短期大学に入学したこと自体を今、どう感じているか	非常に満足	72	75.8%	(65.0%)	自身の学生生活を点数化すると100点満点で何点か?	90~100	45	49.5%	(56.1%)
	やや満足	35	36.8%	(45.8%)		やや満足	22	23.2%	(33.3%)		80~89	22	24.2%	(23.7%)
	やや不満	1	1.1%	(3.3%)		やや不満	1	1%	(1.0%)		70~79	12	13.2%	(13.2%)
	全く不満	1	1%	(0.0%)		全く不満	0	0%	(0.0%)		60~69	7	7.7%	(9.6%)
	平均	3.58	(3.47)	(無回答)		0	0%	(0%)	平均		3.75	(3.65)	(無回答)	0
										83.5				
										N=91, SD=17.6				
										(85.1)				

※平均は「非常に満足」を「4」、「やや満足」を「3」、「やや不満」を「2」、「全く不満」を「1」として算出。

調査は2020年3月14日、各クラスの担任教員により実施された。(協力者:95名)

作成 学内FD担当(2020/03/14)

○卒業時満足度調査 自由記述

◇羽陽短大で特に評価したい点	◇学校側にもっと努力や改善を求める点
<ul style="list-style-type: none"> ・先生が生徒に寄り添ってくれて困ったときは、相談にのってくれて、毎日楽しかった。本当に羽陽短大に入ってよかった。 ・親身になって接してくれた。 ・先生との関わりが密であった。充実していた。(4件) ・先生との距離が近く、話しやすい。相談できる。(8件) ・先生が良いと思う。見守ってくれる。(2件) ・先生みんな優しい、親切、温かい。(6件) ・アットホームな雰囲気(3件) ・先生がフレンドリー 学生と仲が良い。(3件) ・友人との出会い。 ・みんなが明るい。 ・人としての有り方、専門職として働いていく上で の考え方を持つことができた。 ・実習の充実さ。 ・実習に対してのサポートが手厚い。 ・Wi-Fiがあるため、勉強で調べられる。(6件) ・Wi-Fiがあるため、助かった。ありがたかった。 ・ピアノレッスン室がとても良かった。 ・ピアノレッスン室がたくさんあって良い。 ・すべて完璧な学校。 ・学びがあった。 ・設備が充実している。 ・学校が新しい。 ・保育のことが学べること。 ・授業時間に余裕があること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体に Wi-Fi をとばしてほしい。(3件) ・学校全体に Wi-Fi を拡大してほしい。 ・卒論が不平等すぎる。 ・学食があると良かった。(6件) ・日案の書き方だけではなく、就職した時に役立つような記入例の講義があると良いと思った。 ・ピアノレッスン室の音が合っていない。 ・ポットを増やしてほしい。 ・寒い(2件)、温度管理をしてほしい。 ・暑い ・土曜授業が辛い。 ・クラスアビール年一回でよいのでは(2件) ・A先生の授業 ・食べ物を増やしてほしい。 ・学生の意見を取り入れる。 ・介護と保育をこれからどうしていくか、とくに介護。 ・授業がつまらないと思われた時の対処をもっとしてほしい。 ・設備 ・トイレ、ピアノ室がきたない(ほこり) ・90分の授業時間をよくはしよる。 ・就職関係についてはもっと力を入れるべき ・先生によって言っていることがちがう。 ・行事をもっと楽しめるように工夫するべき。

学習成果等アンケート集計結果

令和元年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	2	2	5
2. 入試科目があっていたから	2	0	3
3. 自分の学力にあっていたから	1	2	6
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	43	15	9
5. カリキュラムが充実しているから	2	9	7
6. 資格を取得出来るから	24	26	13
7. 就職に役立つから	2	9	15
8. キャンパスの施設・設備が良いから	0	3	3
9. 地元の大学だから	8	10	16
10. 大学の知名度が高かったから	0	1	1
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	1
12. 学費が安いから	0	1	1
13. 親や教員に勧められたから	2	7	5
14. 本学しか合格しなかったから	0	0	0
15. その他	2	1	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
4	6	9

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味もてる授業が多い	35	42	9	2	0	88	4.25
(2) ためになる授業が多い	49	30	7	2	0	88	4.43
(3) わかりやすい授業が多い	24	41	22	1	0	88	4.00
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	29	36	21	2	0	88	4.05
(5) 就職に役立つ授業が多い	52	30	6	0	0	88	4.52
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	15	26	21	13	13	88	3.19
(7) 授業が良くなるよう工夫している教員が多い	28	38	16	6	0	88	4.00
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	41	34	11	2	0	88	4.30

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	31	43	10	1	0	85	4.22
(2) 専門知識や技能	39	39	6	1	0	85	4.36
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	24	40	19	2	0	85	4.01
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	14	39	25	5	2	85	3.68
(5) 情報機器を使いこなす能力	12	30	23	13	7	85	3.32
(6) 外国語を運用する能力	6	17	31	15	15	84	2.81
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	21	45	12	7	0	85	3.94
(8) リーダーシップをとる力	11	41	25	7	1	85	3.64

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	8	19	29	17	12	85	2.93
(2) 教員の授業力を向上する	14	19	27	14	11	85	3.13
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	12	29	22	16	6	85	3.29
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	11	27	22	16	8	84	3.20
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	16	28	22	11	8	85	3.39
(6) 就職に役立つ授業を充実する	19	24	25	8	9	85	3.42
(7) 地域社会との関わりを重視する	12	26	30	10	7	85	3.31
(8) 施設や設備を充実する	28	27	21	4	5	85	3.81

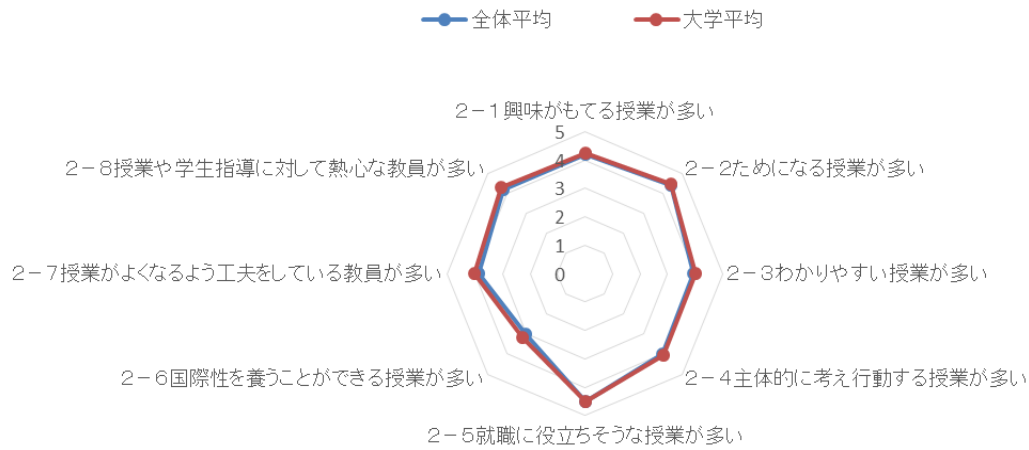
【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	3時間以上 5	2時間以上 3時間未満 4	1時間以上 2時間未満 3	30分以上 1時間未満 2	30分未満 1		
	0	5	21	25	34	85	1.96

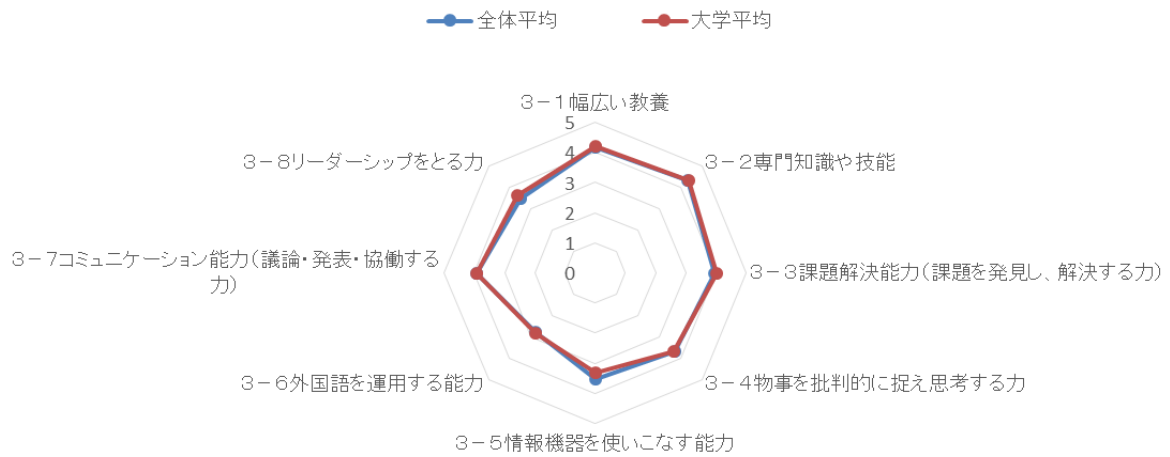
【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
	49	19	10	4	2	84	4.30

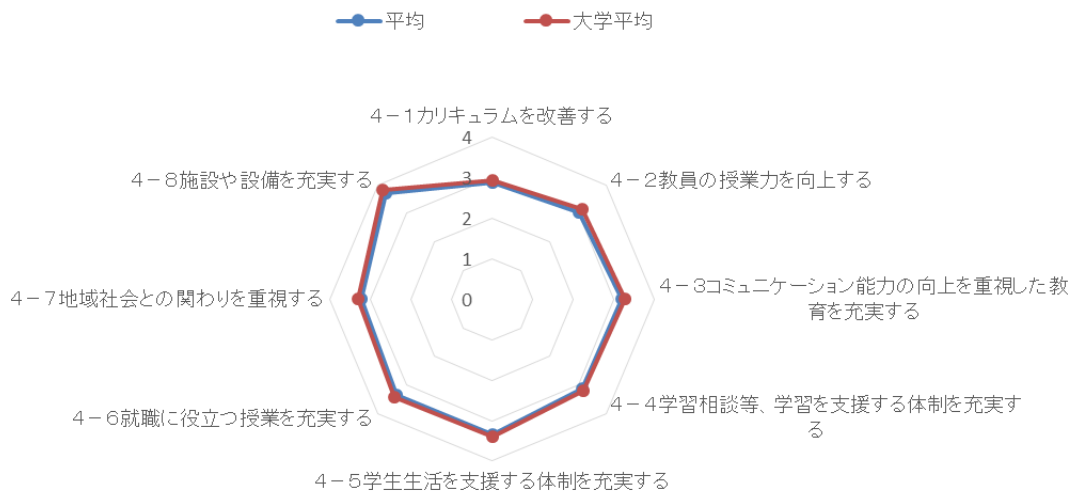
【2】授業について



【3】授業を受けて身についた知識・能力について



【4】改善に向けて取り組むべき事項について



学習成果等アンケート集計結果

令和元年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	5	0	1
2. 入試科目があったから	0	3	1
3. 自分の学力にあったから	2	4	8
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	28	16	8
5. カリキュラムが充実しているから	2	2	5
6. 資格を取得出来るから	25	24	13
7. 就職に役立つから	3	13	12
8. キャンパスの施設・設備が良いから	1	0	4
9. 地元の大学だから	3	5	15
10. 大学の知名度が高かったから	0	0	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	1	0	0
12. 学費が安いから	0	1	0
13. 親や教員に勧められたから	1	7	6
14. 本学しか合格しなかったから	0	0	0
15. その他	5	1	2

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
6	4	7

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
	5	4	3	2	1		
(1) 興味もてる授業が多い	21	40	16	0	0	77	4.06
(2) ためになる授業が多い	42	24	10	1	0	77	4.39
(3) わかりやすい授業が多い	15	37	24	1	0	77	3.86
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	19	39	17	2	0	77	3.97
(5) 就職に役立つ授業が多い	46	21	9	1	0	77	4.45
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	6	11	33	18	9	77	2.83
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	16	28	25	6	2	77	3.65
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	27	31	17	2	0	77	4.08

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
	5	4	3	2	1		
(1) 幅広い教養	21	39	17	0	0	77	4.05
(2) 専門知識や技能	31	35	11	0	0	77	4.26
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	16	38	23	0	0	77	3.91
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	14	32	28	3	0	77	3.74
(5) 情報機器を使いこなす能力	13	36	26	2	0	77	3.78
(6) 外国語を運用する能力	6	11	33	20	7	77	2.86
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	19	35	20	3	0	77	3.91
(8) リーダーシップをとる力	10	24	30	9	3	76	3.38

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
	5	4	3	2	1		
(1) カリキュラムを改善する	1	19	33	12	11	76	2.83
(2) 教員の授業力を向上する	7	15	30	17	7	76	2.97
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	7	22	29	11	7	76	3.14
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	7	18	33	11	7	76	3.09
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	10	28	23	9	6	76	3.36
(6) 就職に役立つ授業を充実する	10	27	24	8	7	76	3.33
(7) 地域社会との関わりを重視する	7	22	29	12	6	76	3.16
(8) 施設や設備を充実する	15	28	23	5	5	76	3.57

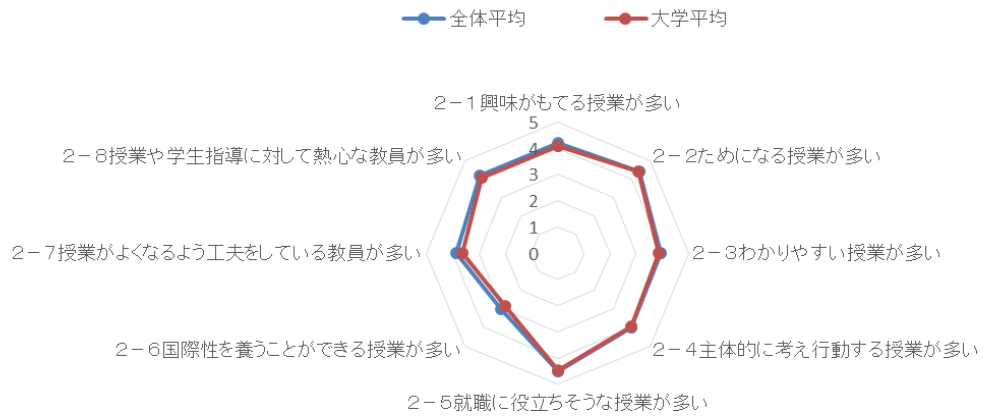
【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)						回答者計	平均値
	3時間以上	2時間以上 3時間未満	1時間以上 2時間未満	30分以上 1時間未満	30分未満		
	5	4	3	2	1		
	0	3	14	12	47	76	1.64

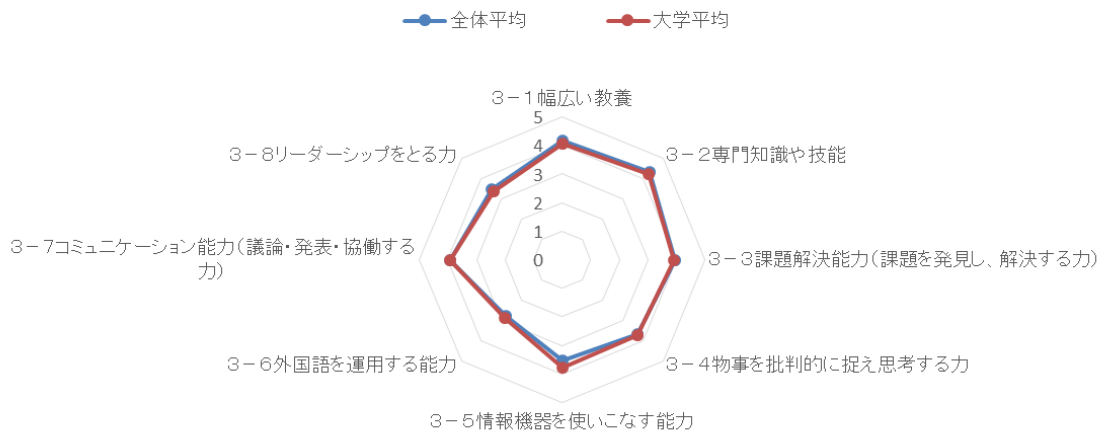
【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

回答内容(点数)						回答者計	平均値
	はい	まあそうである	どちらとも言えない	あまりそうとは言えない	いいえ		
	5	4	3	2	1		
	58	8	7	0	3	76	4.55

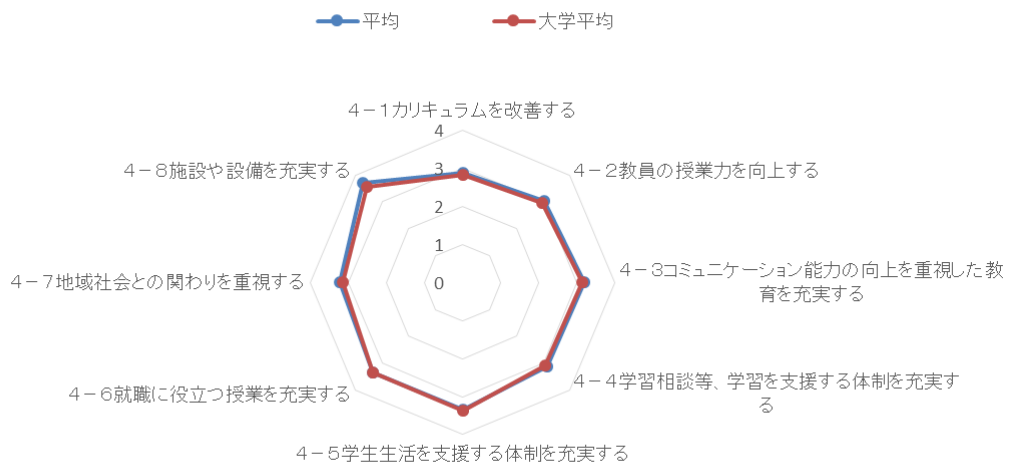
【2】授業について



【3】授業を受けて身についた知識・能力について



【4】改善に向けて取り組むべき事項について



学習成果等アンケート集計結果

令和元年12月実施

【1】あなたが本学への入学を決定された理由を強い順に3つ下記から選んでマークしてください。

	第一理由	第二理由	第三理由
1. 建学の理念に共感したから	0	0	1
2. 入試科目があっていたから	0	0	1
3. 自分の学力にあっていたから	0	1	1
4. 学びたい学部・学科・コースがあったから	5	2	0
5. カリキュラムが充実しているから	3	2	2
6. 資格を取得出来るから	3	8	1
7. 就職に役立つから	2	0	4
8. キャンパスの施設・設備が良いから	0	1	1
9. 地元の大学だから	0	0	2
10. 大学の知名度が高かったから	0	0	0
11. 大学が設置されている地域に魅力があるから	0	0	0
12. 学費が安いから	0	0	0
13. 親や教員に勧められたから	1	1	2
14. 本学しか合格しなかったから	0	0	0
15. その他	1	0	0

「第一理由」「第二理由」「第三理由」それぞれの回答数を集計し、「第一理由」回答数に「3点」、「第二理由」回答数に「2点」、「第三理由」回答数に「1点」をかけた上で合計し、その合計点の上位3位。

第一理由	第二理由	第三理由
6	4	5

【2】本学の授業に関する以下の項目について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 興味もてる授業が多い	6	9	0	0	0	15	4.40
(2) ためになる授業が多い	8	7	0	0	0	15	4.53
(3) わかりやすい授業が多い	4	8	3	0	0	15	4.07
(4) 主体的に考え行動する授業が多い	4	6	4	1	0	15	3.87
(5) 就職に役立つ授業が多い	9	5	1	0	0	15	4.53
(6) 国際性を培うことができる授業が多い	1	7	2	3	2	15	3.13
(7) 授業が良くなるよう工夫をしている教員が多い	6	6	2	1	0	15	4.13
(8) 授業や学生指導に対して熱心な教員が多い	6	7	2	0	0	15	4.27

【3】授業を受けて、あなたは下記の知識や能力を身につけることができましたか。該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) 幅広い教養	5	10	0	0	0	15	4.33
(2) 専門知識や技能	7	7	1	0	0	15	4.40
(3) 課題解決能力(課題を発見し、解決する力)	2	10	3	0	0	15	3.93
(4) 物事を批判的に捉え思考する力	0	10	5	0	0	15	3.67
(5) 情報機器を使いこなす能力	1	8	5	0	1	15	3.53
(6) 外国語を運用する能力	0	1	5	4	5	15	2.13
(7) コミュニケーション能力(議論・発表・協働する力)	5	6	3	1	0	15	4.00
(8) リーダーシップをとる力	3	3	3	5	1	15	3.13

【4】本学の改善に向けて今後取り組むべき事項について、該当する数字をそれぞれ一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
(1) カリキュラムを改善する	1	4	5	2	3	15	2.87
(2) 教員の授業力を向上する	1	4	6	2	2	15	3.00
(3) コミュニケーション能力の向上を重視した教育を充実する	1	3	6	3	2	15	2.87
(4) 学習相談等、学習を支援する体制を充実する	0	6	5	1	3	15	2.93
(5) 学生生活を支援する体制を充実する	1	4	5	3	2	15	2.93
(6) 就職に役立つ授業を充実する	1	6	4	2	2	15	3.13
(7) 地域社会との関わりを重視する	3	2	6	3	1	15	3.20
(8) 施設や設備を充実する	6	3	4	1	1	15	3.80

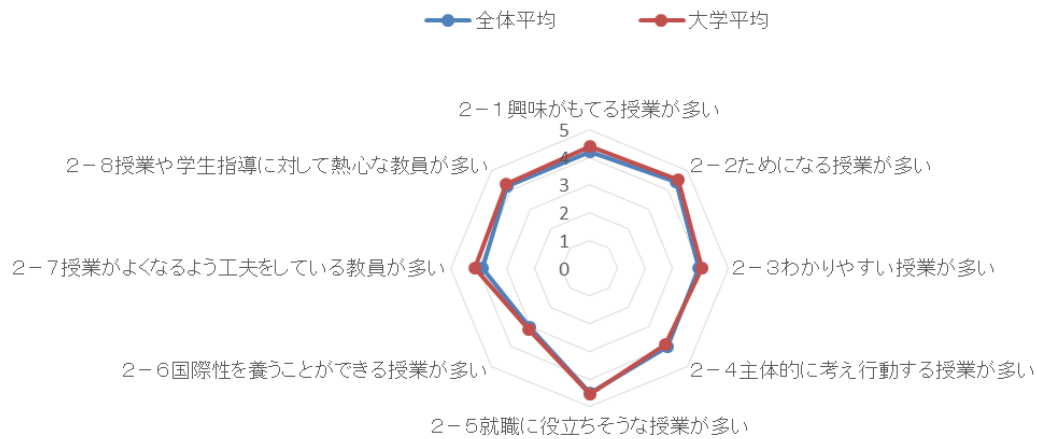
【5】この一年間において、授業の予習・復習時間は1日につき平均何時間ですか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	3時間以上 5	2時間以上 3時間未満 4	1時間以上 2時間未満 3	30分以上 1時間未満 2	30分未満 1		
	3	3	2	3	4	15	2.87

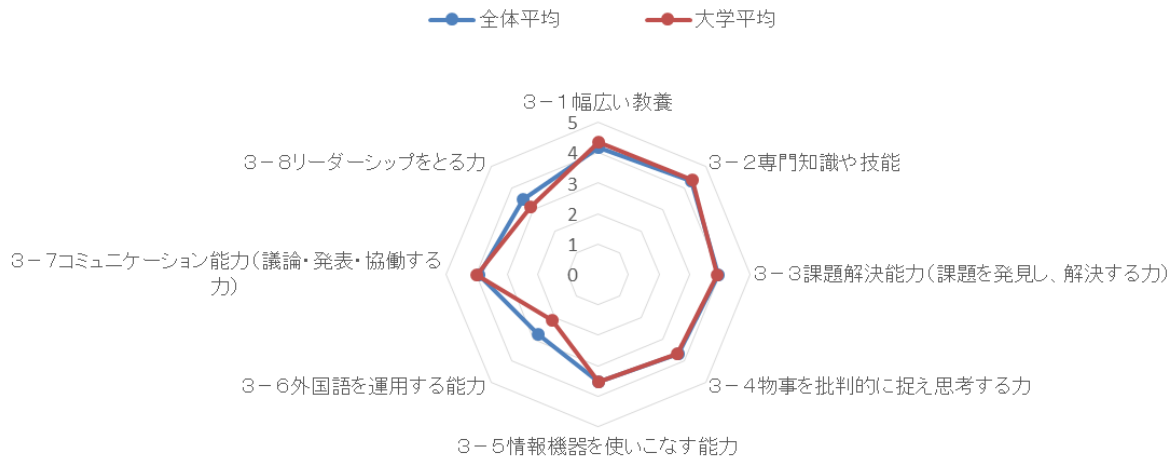
【6】あなたは、本学に入学して良かったと思いますか。該当する数字を一つ選んでマークしてください。

質問内容	回答内容(点数)					回答者計	平均値
	はい 5	まあそう ある 4	どちらとも 言えない 3	あまりそうと は言えない 2	いいえ 1		
	10	4	1	0	0	15	4.60

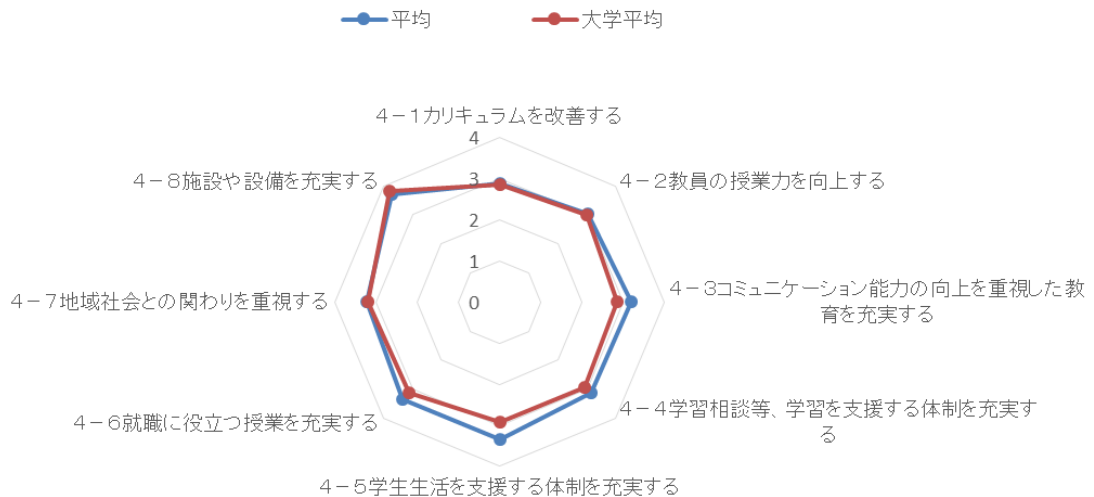
【2】授業について



【3】授業を受けて身についた知識・能力について



【4】改善に向けて取り組むべき事項について



授業科目名	代表教官	随修者数	回答案数	回答案率	勤続1	勤続2	勤続3	意欲平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探究平均	熟達平均	教養力平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均(%)				模範平均	環境平均	オゾン	総合平均	
																3時間以上	2~3時間	1~2時間	30分未満					
基礎教養入門	松田知	103	104	101.00	6	5	4	4.2	4.1	4.1	4.1	4.0	4.3	4.2	3.8	7.0	5.0	10.0	4.0	74.0	4.1	4.3	3.8	4.2
倫理学	平田	58	47	81.00	6	5	4	3.9	3.6	3.7	3.6	4.0	4.0	3.7	3.7	2.2	6.5	10.0	0.0	82.6	3.7	3.9	4.3	3.7
経済学	下平	45	41	91.10	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.2	4.0	4.6	4.4	4.1	7.3	2.5	15.0	12.5	62.5	4.4	4.6	3.0	4.5
音楽基礎A(歌)	高橋	103	96	93.20	6	4	5	4.7	4.7	4.7	4.7	4.4	4.9	4.7	4.7	12.8	12.8	21.3	28.7	24.5	4.3	4.7	4.3	4.8
音楽基礎B(器楽)	白崎	103	97	94.20	6	4	5	4.8	4.7	4.7	4.8	4.7	4.7	4.7	4.7	25.8	16.5	36.1	15.5	6.2	4.6	4.7	4.2	4.8
習字	石沢	105	100	95.20	6	4	4	4.8	4.7	4.6	4.6	4.5	4.7	4.7	4.8	4.0	3.0	13.0	7.0	73.0	4.7	4.7	4.4	4.8
如習教養論	大隈	103	96	93.20	6	5	4	4.6	4.5	4.4	4.3	3.9	4.8	4.6	4.6	2.1	3.2	14.9	20.2	59.6	4.6	4.6	4.2	4.7
教育原理	大隈	103	97	94.20	6	4	4	4.6	4.4	4.4	4.2	3.8	4.8	4.6	4.1	5.2	0.0	10.4	17.7	66.7	4.5	4.6	4.2	4.7
教育の方法と技術	坂部	103	96	93.20	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.1	4.1	4.2	4.1	4.0	5.2	1.0	8.3	7.3	78.1	4.1	4.4	4.0	4.3
教育実習指導	大隈	103	97	94.20	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.0	3.8	4.7	4.3	3.9	5.3	2.1	16.0	17.0	59.6	4.4	4.2	4.4	4.5
社会福祉概論	伊藤	103	98	95.10	6	5	4	4.4	4.3	4.2	4.2	4.0	4.2	4.2	4.1	5.3	4.2	9.5	7.4	73.7	4.3	4.4	4.3	4.4
保育原理	木田	103	98	95.10	6	4	5	4.6	4.5	4.4	4.3	4.0	4.7	4.5	4.3	7.4	3.2	10.5	9.5	69.5	4.6	4.6	4.1	4.7
社会的養護Ⅰ	菅原	103	96	93.20	6	5	4	4.2	4.0	4.1	4.0	4.0	4.2	3.9	3.9	7.3	4.2	13.5	8.3	66.7	3.9	4.1	3.4	4.1
子どもの保健Ⅰ	小林美	104	92	88.50	6	5	5	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.6	4.4	4.4	2.3	4.5	10.2	8.0	75.0	4.4	4.6	3.8	4.6
子どもの食と栄養A	中村	104	98	94.20	6	5	4	4.6	4.6	4.6	4.5	4.4	4.8	4.6	4.6	5.2	6.3	16.7	24.0	47.9	4.6	4.7	4.2	4.7
子どもの食と栄養B	中村	50	48	96.00	6	5	4	4.6	4.5	4.5	4.5	4.3	4.7	4.6	4.6	6.3	2.1	25.0	31.3	35.4	4.6	4.6	3.5	4.7
乳児保育Ⅰ	柴田ふ	103	95	92.20	6	5	5	3.2	2.9	3.0	2.7	2.7	2.9	2.4	2.3	2.1	1.1	9.5	4.2	83.2	3.1	2.8	2.0	2.7
児童文化	阿部か	103	98	95.10	6	4	4	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.8	4.8	4.8	13.4	3.1	14.4	19.6	49.5	4.6	4.7	4.3	4.8
子どもの生活と福祉	伊藤	16	16	100.00	6	5	4	4.4	4.4	4.4	4.1	4.1	4.1	4.3	3.9	0.0	0.0	6.3	6.3	87.5	4.5	4.4	4.3	4.3
日本国憲法	高木	83	81	97.60	6	5	4	3.4	2.9	3.0	3.0	3.0	3.9	3.0	2.8	3.7	1.2	9.9	7.4	77.8	3.2	3.6	3.2	3.2
こども音楽B(器楽)	白崎	78	74	94.90	6	5	4	4.7	4.7	4.6	4.7	4.5	4.7	4.7	4.6	18.9	10.8	28.4	27.0	14.9	4.5	4.6	4.3	4.8
こども音楽C(歌)	高橋	81	68	84.00	6	5	4	4.5	4.3	4.1	4.2	4.0	4.3	4.3	4.3	3.0	6.1	6.1	7.6	77.3	4.2	4.3	4.0	4.4
国語表現法	相倉	16	14	87.50	1	5	4	4.6	4.3	4.3	4.2	4.0	4.4	4.1	4.0	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	4.0	4.4	4.5	4.5
保育内容研究-健康	高桑	83	75	90.40	6	5	4	4.0	3.9	3.8	3.8	3.7	4.1	3.8	3.4	2.7	1.4	9.6	5.5	80.6	3.7	4.0	3.3	4.0
保育内容研究-人間関係	大田	82	65	79.30	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.2	4.1	4.5	4.4	4.3	6.3	1.6	12.5	7.8	71.9	4.4	4.4	3.7	4.5
保育内容研究-言葉	相倉	83	79	95.20	6	5	4	4.2	4.1	4.0	4.0	3.9	4.3	4.2	4.0	2.5	3.8	3.8	8.9	81.0	4.1	4.4	3.9	4.4
保育内容研究-表現	白崎	83	68	81.90	6	5	4	4.1	4.2	4.1	4.1	4.1	4.4	4.3	4.3	3.0	0.0	9.1	13.6	74.2	4.1	4.0	3.4	4.3
子どもの生活と文化Ⅰ	大隈	69	53	76.80	6	5	4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.2	4.6	4.3	4.3	1.9	1.9	3.8	1.9	90.6	4.3	4.4	4.2	4.4
臨床心理学	浅倉	82	63	76.80	6	5	4	3.7	3.5	3.4	3.3	3.3	3.8	3.0	3.1	1.6	0.0	1.6	12.9	83.9	3.2	3.6	2.8	3.4
相談援助	吉田	83	74	89.20	6	5	4	4.2	4.2	4.1	4.0	4.0	4.3	4.3	4.1	1.4	2.8	4.2	5.6	86.1	4.2	4.3	4.1	4.3
保育内容総論	花田	83	73	88.00	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.2	4.2	4.4	4.3	4.2	5.6	5.6	8.3	7.2	72.2	4.3	4.4	4.3	4.4
社会的養護Ⅰ内容	伊藤	83	72	86.70	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.1	4.0	4.2	4.2	4.0	5.7	1.4	4.3	7.1	81.4	4.2	4.4	3.9	4.4
介護福祉総論Ⅰ	荒木	10	11	110.00	1	5	5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.5	4.8	4.8	4.8	9.1	9.1	0.0	9.1	72.7	4.5	4.6	4.0	5.0
保育実務研究Ⅰ	高橋	62	55	88.70	1	5	4	4.6	4.6	4.5	4.5	4.5	4.7	4.6	4.7	5.7	9.4	13.2	13.2	58.5	4.3	4.5	4.7	4.7
介護保険制度	伊藤	15	14	93.30	6	5	4	4.0	3.7	3.8	3.7	3.8	4.0	3.8	3.7	7.1	0.0	21.4	0.0	71.4	4.1	4.1	4.0	3.8
介護の基本Ⅱ	伊藤	15	15	100.00	6	5	4	3.9	3.8	3.9	3.7	3.7	4.0	3.9	3.9	7.1	7.1	7.1	0.0	78.6	4.1	4.1	4.5	4.1
介護の基本Ⅲ	柴田哲	15	15	100.00	6	5	4	4.5	4.3	4.3	4.3	4.3	4.7	4.7	4.7	13.3	6.7	0.0	0.0	80.0	4.2	4.7	4.5	4.7
コミュニケーション技術Ⅰ	重吉	15	15	100.00	6	5	4	3.9	3.7	3.6	3.5	3.6	4.0	3.5	3.3	3.3	0.0	13.3	13.3	6.7	3.9	3.7	3.5	3.9
生活支援技術Ⅰ	宮地	15	14	93.30	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.4	4.4	4.6	4.6	4.6	4.6	14.3	7.1	28.6	50.0	4.6	4.6	4.0	4.6
生活支援技術Ⅱ	安陵	15	14	93.30	6	5	4	3.4	3.4	3.3	3.0	2.9	4.1	2.7	2.8	7.1	0.0	14.3	7.1	71.4	3.0	3.4	4.0	2.9
生活支援技術Ⅲ	阿部伸	15	15	100.00	6	5	4	3.9	3.8	3.7	3.5	3.5	4.1	3.2	3.7	0.0	6.7	13.3	0.0	80.0	3.5	3.8	3.0	3.7
生活支援技術Ⅳ	楠本	15	15	100.00	6	5	4	3.9	3.6	3.9	3.7	3.5	4.5	4.1	3.7	14.3	0.0	7.1	7.1	71.4	3.6	4.2	4.4	4.1
介護過程Ⅰ	荒木	15	14	93.30	6	5	4	4.1	4.0	4.2	4.0	4.0	4.4	3.9	4.1	0.0	7.1	21.4	14.3	57.1	4.1	4.3	5.0	4.4
介護過程Ⅱ	櫻井	15	15	100.00	6	5	4	4.5	4.5	4.5	4.3	4.3	4.6	4.6	4.6	6.7	6.7	6.7	13.3	73.3	4.5	4.5	4.0	4.6
介護総合演習Ⅰ	荒木	15	14	93.30	6	5	4	4.2	4.3	4.1	4.1	3.9	4.4	4.1	4.2	0.0	7.1	14.3	7.1	71.4	4.1	4.2	4.0	4.2
発達と老化の理解	宮地	15	13	86.70	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.3	4.6	4.5	4.5	7.7	15.4	7.7	15.4	53.8	4.5	4.6	4.0	4.5
こころからだⅠ	松田水	15	14	93.30	6	4	5	4.6	4.6	4.6	4.6	4.8	4.8	4.6	4.6	0.0	14.3	7.1	14.3	64.3	4.6	4.6	4.0	4.6
社会福祉演習	伊藤	15	14	93.30	6	5	4	4.1	3.9	3.9	3.8	3.8	3.9	3.9	3.9	7.1	7.1	21.4	7.1	57.1	4.1	4.1	4.5	4.1
医療的ケアⅠ	松田水	15	14	93.30	6	5	4	4.7	4.7	4.8	4.6	4.6	4.7	4.7	4.7	7.1	7.1	14.3	14.3	57.1	4.7	4.7	4.0	4.7

授業科目名	代表教官	履修者数	回次数	回答率	動機1	動機2	動機3	意味平均	理解平均	向上平均	自発的平均	探究平均	熱意平均	教え方平均	コミュニケーション平均	勉強時間平均(%)					板書平均	環境平均	オンライン	総合平均
																3時間以上	2~3時間	1~2時間	30分~1時間	30分未満				
総合科目	渡邊	41	34	82.90	6	5	4	4.4	4.2	4.2	4.1	4.0	4.5	4.4	4.2	4.2	3.0	3.0	9.1	6.1	7.8	4.3	4.4	4.4
文学	柏倉	15	15	100.00	6	2.5	4	4.6	4.7	4.7	4.6	4.4	4.7	4.6	4.7	13.3	0.0	6.7	6.7	7.3	4.5	4.7	4.6	
英語コミュニケーション	小林浩	101	92	91.10	6	5	4	4.4	4.3	4.2	4.1	4.1	4.4	4.2	4.3	4.3	5.4	7.6	17.4	6.5	4.3	4.4	4.1	
体育実技	高桑	102	96	94.10	6	5	4	4.6	4.6	4.5	4.5	4.3	4.3	4.3	4.1	6.3	3.1	5.2	8.3	7.1	4.1	4.3	4.2	
体育講義	高桑	104	95	91.30	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.0	4.0	4.2	4.1	4.0	3.2	2.1	10.5	9.5	7.4	4.1	4.2	3.6	
こども学A	高橋	100	81	81.00	6	4	4	4.6	4.7	4.5	4.5	4.4	4.7	4.7	4.7	4.9	2.5	9.9	9.9	7.2	4.5	4.7	4.6	
園遊工作	花田	102	90	88.20	6	5	4	4.7	4.7	4.7	4.6	4.6	4.6	4.7	4.6	1.4	6.8	9.1	10.2	6.2	4.7	4.7	4.4	
保育内容指掌法	大槻	101	88	87.10	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.1	4.8	4.6	4.6	5.7	3.4	10.3	14.9	6.5	4.6	4.7	4.5	
教育心理学	大槻	100	90	90.00	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.1	4.8	4.6	4.4	6.7	1.1	13.3	12.2	6.7	4.6	4.6	4.8	
発達心理学	木田	102	87	85.30	6	5	4	4.5	4.4	4.4	4.3	4.2	4.6	4.6	4.5	5.7	4.6	11.5	9.2	6.9	4.6	4.6	4.3	
教育の歴史と経営	松田知	101	99	98.00	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.1	4.1	4.4	4.2	4.2	8.2	5.1	8.2	10.2	6.8	4.3	4.4	4.6	
保育教育課程論	小林浩	101	94	93.10	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.4	4.3	4.3	6.5	5.4	7.6	7.6	7.2	4.3	4.4	4.5	
保育教育課程論	大槻	101	92	91.10	6	5	4	4.5	4.5	4.5	4.4	4.4	4.6	4.5	4.3	3.3	6.6	12.1	16.5	6.1	4.5	4.5	5.0	
保育内容指掌法	菅原	101	96	95.00	6	5	4	4.2	4.1	4.1	4.1	4.0	4.1	4.0	4.0	9.6	7.4	11.7	6.4	6.4	4.0	4.1	4.4	
子ども家庭支援法	小林美	101	82	81.20	6	5	4	4.5	4.5	4.4	4.3	4.3	4.7	4.5	4.4	7.5	5.0	5.0	10.0	7.2	4.6	4.6	4.5	
乳児保育Ⅰ	柴田	101	93	92.10	6	5	4	3.9	3.9	3.9	3.7	3.7	3.9	3.5	3.5	7.5	3.2	8.6	8.6	7.2	3.9	3.8	4.3	
子どもの食と栄養B	中村	52	49	94.20	6	5	4	4.8	4.7	4.7	4.7	4.6	4.8	4.8	4.8	14.6	4.2	12.5	14.6	5.4	4.7	4.8	4.0	
介護福祉総論Ⅰ	宮地	41	42	102.40	6	5	5	4.9	4.8	4.8	4.8	4.7	4.9	4.9	5.0	9.5	4.8	11.9	19.0	5.4	4.7	4.9	4.8	
介護福祉総論Ⅱ	伊藤	44	38	86.40	6	5	4	4.4	4.3	4.3	4.4	4.2	4.4	4.5	4.5	8.1	2.7	8.1	13.5	6.7	4.6	4.6	4.3	
保育実習指導Ⅰ	豊橋	101	94	93.10	6	5	4	4.5	4.5	4.5	4.5	4.3	4.5	4.4	4.3	9.7	6.5	9.7	10.8	6.3	4.4	4.5	4.3	
保育実習指導Ⅱ	石沢	38	38	100.00	1	5	4	4.5	4.6	4.5	4.5	4.4	4.7	4.6	4.6	5.6	2.8	0.0	5.6	8.1	4.6	4.6	4.6	
園遊工作Ⅱ	大木	81	76	93.80	6	5	4	4.3	4.4	4.4	4.3	4.3	4.5	4.5	4.4	4.1	4.1	13.5	10.8	6.7	4.4	4.5	4.2	
子どもの生活と文化Ⅰ	柏倉	50	42	84.00	6	5	4	3.9	3.9	3.9	3.9	3.9	4.1	3.8	3.8	4.8	2.4	14.3	9.5	6.9	3.9	3.9	4.0	
子どもの生活と文化Ⅱ	高桑	8	8	100.00	1	2	3	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.0	4.1	4.0	12.5	2.0	0.0	12.5	5.0	4.1	4.1	4.5	
保育実習指導Ⅰ(幼稚園)	柏倉	81	73	90.10	6	5	4	4.0	4.0	4.0	3.9	3.9	4.1	4.0	3.9	0.0	2.8	13.9	4.2	7.9	4.1	4.1	3.5	
保育実習指導Ⅱ	大槻	63	54	85.70	6	4.5	4	4.5	4.5	4.4	4.3	4.3	4.6	4.6	4.3	9.3	1.9	5.6	7.8	4.5	4.6	4.4	4.6	
保育実習指導Ⅲ	大木	28	27	96.40	6	5	4	4.1	4.2	4.3	4.2	4.1	4.4	4.3	4.4	0.0	0.0	11.1	0.0	8.8	4.2	4.2	3.5	
情報処理実習	松田知	81	77	95.10	6	5	4	4.3	4.2	4.2	4.1	4.0	4.3	4.2	4.1	3.9	0.0	10.4	7.8	7.9	4.1	4.1	3.9	
保育原理Ⅰ	海和	14	14	100.00	6	4	1.5	4.3	4.1	4.0	3.9	4.1	4.4	4.1	4.2	7.1	0.0	2.4	14.3	5.7	4.2	4.3	3.7	
子どもの保健Ⅱ	小林美	58	46	79.30	6	5	4	4.3	4.3	4.3	4.3	4.3	4.6	4.3	4.2	2.2	4.3	2.2	4.3	8.7	4.4	4.5	5.0	
障害児保育	鏡	81	79	97.50	6	5	4	4.4	4.4	4.4	4.3	4.2	4.6	4.4	4.4	3.8	1.3	10.1	10.1	7.4	4.3	4.5	4.2	
家庭支援論	伊藤	81	67	82.70	6	5	4	4.3	4.3	4.2	4.3	4.2	4.3	4.3	4.1	7.6	3.0	7.6	7.6	7.4	4.3	4.3	4.4	
保育相談支援	吉田	82	80	97.60	6	5	4	4.1	4.1	4.1	4.1	4.1	4.3	4.2	4.2	5.1	1.3	10.3	6.4	7.9	4.2	4.2	4.0	
保育実習指導Ⅱ	高橋	81	71	87.70	6	5	4	4.4	4.4	4.3	4.3	4.2	4.2	4.2	3.9	5.6	4.2	15.5	4.2	7.0	4.0	4.1	3.9	
保育実習指導Ⅲ	高桑	5	5	100.00	1, 6	4	2	4.4	5.0	4.8	4.8	4.8	4.8	4.8	5.0	0.0	0.0	0.0	20.0	8.0	5.0	4.8	5.0	
介護の基本Ⅰ	荒木	14	15	107.10	6	5	4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.3	4.6	4.5	4.6	2.0	0.0	4.0	3.3	6.7	4.4	4.3	5.0	
介護の基本Ⅳ	荒木	14	14	100.00	6	5	4	4.2	4.3	4.2	4.4	4.4	4.8	4.5	4.8	14.3	14.3	35.7	28.6	7.1	4.4	4.4	4.7	
介護の基本Ⅴ	櫻井	14	14	100.00	6	5	4	4.1	4.1	4.2	4.2	4.1	4.5	4.3	4.3	7.1	14.3	35.7	21.4	4.4	4.3	4.3	4.4	
コミュニケーション技術Ⅰ	荒木	14	14	100.00	6	5	4	4.4	4.5	4.6	4.6	4.6	4.9	4.9	4.9	7.7	15.4	76.9	0.0	0.0	4.5	4.6	4.9	
生活支援技術Ⅴ	宮地	14	14	100.00	6	5	4	4.3	4.4	4.5	4.5	4.3	4.6	4.5	4.6	14.3	14.3	21.4	14.3	35.7	4.4	4.5	5.0	
生活支援技術Ⅵ	鈴木孝	14	14	100.00	6	5	4	4.1	4.1	4.1	4.0	3.9	4.4	4.0	4.1	0.0	14.3	14.3	14.3	5.7	4.1	4.0	4.2	
生活支援技術Ⅶ	荒木	14	14	100.00	6	5	4	4.6	4.6	4.5	4.6	4.4	4.6	4.6	4.6	7.1	28.6	0.0	7.1	5.7	4.6	4.6	4.6	
介護総論Ⅱ	荒木	14	14	100.00	6	5	4	4.4	4.4	4.6	4.5	4.6	4.8	4.8	4.7	2.4	28.6	42.9	7.1	0.0	4.6	4.5	5.0	
介護総合実習Ⅰ	松田水	14	14	100.00	6	5	4	4.3	4.3	4.3	4.2	4.2	4.4	4.4	4.4	15.4	15.4	15.4	15.4	38.5	4.4	4.4	5.0	
認知症の理解	松田水	14	14	100.00	6	5	4	4.3	4.4	4.4	4.3	4.4	4.6	4.5	4.6	14.3	14.3	21.4	14.3	35.7	4.4	4.5	5.0	
障害の理解	伊藤	14	14	100.00	6	5	4	3.8	3.7	3.9	3.8	3.5	3.6	3.6	3.6	7.1	7.1	35.7	14.3	35.7	3.7	3.8	4.0	
こころのからだⅡ	松田水	14	14	100.00	6	5	4	4.3	4.4	4.4	4.3	4.3	4.6	4.6	4.5	14.3	7.1	35.7	7.1	35.7	4.4	4.5	4.0	
社会福祉実習	伊藤	14	14	100.00	6	5	4	3.7	3.8	3.8	3.7	3.6	3.8	3.8	3.8	14.3	7.1	28.6	14.3	35.7	3.8	3.9	3.9	
医療的ケアⅡ	宮地	14	14	100.00	6	5	4	4.5	4.4	4.3	4.4	4.3	4.6	4.5	4.5	14.3	14.3	21.4	21.4	4.9	4.4	4.5	4.4	

羽陽学園短期大学 FD・SD 活動報告書
(2019 年度)
通巻 13 巻

2020 年 6 月 1 日

編集 FD・SD 推進委員会

渡邊 洋一

柏倉 弘和

松田 知明

太田 裕子

宮地 康子

白崎 直季

石沢 惠理

今野 清

浦山 仁一

奥山 康夫

芳賀 亜樹子

発行者 渡邊 洋一

発行所 羽陽学園短期大学 FD・SD 推進委員会